●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9 - 2

現代父親考

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1. 子どもとの距離 …… 7

- 子どもとの接触 …… 7
- 子どもを知っているか …… 9
- 子どもから知られているか …… 12

2. 子どもへの評価 …… 14

- 子どもへの満足度 …… 14
- わが子をどう見ているか …… 16
- 周囲の子をどう見ているか …… 20

3. 父親としての教育的対応 …… 23

- しつけへの参加 …… 23
- 教育的行動 …… 26
- 子どもの将来への期待 …… 27
- 父親の役割意識 …… 30

4. 理想の父親像をめぐって …… 33

- 子どもから見た父親としての自分 …… 33
- 子どもの頃見た自分の父親 …… 34
- 理想とする父親像 …… 36
- 父親像をめぐって …… 37

まとめに代えて …… 39

地球社会の子どもたち ⑬
タイペイ－その3　自助餐 …… 深谷昌志 …… 41

資料1　調査票見本 …… 46

資料2　学年・性別集計表 …… 56

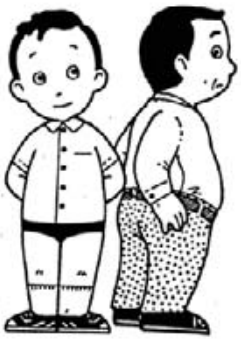
※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

調査レポート
現代父親考
要約

千葉市教育センター　上杉賢士
放送大学客員教授　深谷昌志

1．調査の目的

明るいイメージで子どもたちに受け入れられている現在の父親たちは、自分の父親ぶりをどのように評価しているのであろうか。子どもへの対応や家庭教育への関与の状況を中心に、現在の父親像を探ろうとした。



2．子どもとの距離

父親たちは、子どもが高学年になると次第にその姿がとらえにくくなる。その一方で、子どもたちは父親への関心を深める。子どもの学年発達は、父子関係に〝すれちがい〟的な状況を生み出しているようである。
（図5、図7）

3．わが子への評価

父親たちは、わが子に対して、かなり好意的な見方をしていた。しかし、父親の年齢が下がるにつれて、シビアな見方も増してくる。(図8、図12)

4．最近の子どもたちへの評価

わが子の周囲にいる子どもたち一般に対しては、必ずしも好意的には見ていない。それは、わが子に対する評価とかなり強い相関関係にある。また、父親の年齢による差も顕著で、若い父親ほど、周囲の子どもたちに対する評価もきびしい。(図13～図15)

5．しつけへの参加

子どもがいけないことをしたら叱るという父親は、意外にも若い父親ほど多い。加えて、授業参観への出席や近所の子どもと遊んであげるなど、子どもの教育に関わって、行動的な父親が目立つ。(図17、図18)

要　約

6．子どもへの期待

多くの父親は、子どもに対して、職業的達成よりもむしろ、充実した個人生活を営むことを願っている。(図20)

7．家庭教育における役割意識

若い父親には、妻とパートナーシップを結び、協同で子どもの教育にあたろうと考える傾向が強い。そのせいもあって、父親と母親は、ますます同質化の傾向を強めるものと予想される。(図24、図25)

8．理想とする父親像

従来の「頼りがい」や「がんばり」「勇気」などに加えて、「明るさ」や「やさしさ」も、父親には欠かせない条件であると考えている。その反面、子どもに対する「きびしさ」や「教育への熱心さ」は、それほど必要ないと考えられている。
(図28、図29)

●調査概要

1.調査主題　現代父親考

2.調査視点　父親の変質が指摘される中で、当の父親たちは、どのような自己像を抱いているのだろうか。子どもへの対応や家庭教育における役割意識を中心にして、その点を探ってみた。

3.調査項目　子どもとの接触状況、子どもに対する評価、しつけへの参加度、父親としての自分への評価、など。

9．父親としての自分

若い父親たちは、多くの部分ですでに自分の父親を超えたと考え始めているようである。いわば目標を失った後に、どういう父親像を求めるかが、今後の課題となろう。(図30)

10．まとめに代えて

若い父親たちの中には、父親としての自分に対する子どもからの評価にかなり関心を向けている傾向がある。同質化した家族の中では、ことさらに父親としての役割を演じようとするより、精一杯生きる率直な姿を見せる方向に、これからの父親像を描けばよいのかも知れない。

4.調査時期　1988年12月

5.調査対象　東京、千葉、富山の小学校２・４・６年生を持つ父親

6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数

(人)

学年／性	男　子	女　子	計
2　年	166	185	351
4　年	206	213	419
6　年	222	229	451
計	594	627	1,221

はじめに

父親に関する最近の調査レポートの多くは共通して、父親が変わったことを指摘している。

例えば、「モノグラフ・小学生ナウ vol.8-3父子関係」では、父親と母親の同質化が指摘されている。また、同じく「vol.4－3父親」には、子どもとの接触量が多く、子どもたちからかなり好意的な評価を受けている父親の姿が示されている。

こうしたデータを見る限り、かつての権威を持って家庭をリードした父親像が影をひそめつつあるのは、疑いのない事実である。

そうした変化を、当の父親たちはどう受け止めているのであろうか。あらためて「父親」をテーマとする本レポートでは、そうした角度からのアプローチを試みる。

一方には、外に出て働く母親の姿が一般的になってきているという事情がある。その結果、多少なりとも家庭内におけるそれまでの夫婦間の役割分担の図式は変更を余儀なくされる。こうした傾向の中で、父親たちはどのような役割を獲得しようとしているのであろうか。

また、一口に父親といっても、その生まれた年代は、戦前から高度成長期の初頭あたりまでの極めて広範囲にわたる。彼らのモデルとなるその父親もまた、さまざまな時代の相を背負っていたはずである。

そうしたモデルとの対比の中で、父親たちは、現在の自らの父親ぶりをどう見つめているのであろうか。

こうした問題にある種の解答が得られれば、父親像の今後を占う重要な手がかりとなるはずであろう。

なお、本調査の対象となった小学校2・4・6年生の父親、計1,221名の年齢構成は、次の通りである。

30歳以下――　5名（ 0.4%）
31～35歳――　107名（ 8.8%）
36～40歳――　520名（42.6%）
41～45歳――　447名（36.6%）
46歳以上――　142名（11.6%）

小学生の父親の大半は、戦後生まれの世代が占めている。しかし、5歳区切りのスケールで回答を求めたため、上・下限は定かではないが、極端に言えば親子ほどにも年齢が離れた者たちが、「小学生の父親たち」を構成している。

全体として、父親が変質したのは疑いのない事実であるにせよ、その幅や受け止め方に違いがあって当然である。

そこで、本レポートでは父親の年齢差を分析のひとつの軸に設定し、主として時系的変化といった観点からの考察を試みることにしたい。

1. 子どもとの距離

まず、これまでに実施した父親調査の結果をおさらいする意味も含めて、家庭内における父親と子どもが、どのような関係にあるかを概観しておこう。

子どもとの接触

図1は、用意した10項目について、それぞれ子どもとどのくらいいっしょにするかをたずねた結果である。

接触の具体的な内容や形態にかなり違いがあるため、結果は、上位4項目と下位6項目の間にかなりの差が生じている。

上位4項目は、いわば日常的な接触である。「週に3～5回」、すなわち「ときどき父親がいっしょでない日がある」くらいを目安にすれば、おしゃべりや食事、テレビを見るなどの場面で、この条件をクリアする家庭は半数を超える。「父親不在」という象徴的な表現も一方にはあるが、少なくとも物理的には父と子が接触する機会は、それほど少なくない。

「週に1～2回」、すなわち「ときどき父親もいっしょ」というレベルにまで枠を広げれば、下位の6項目もそれほど悲観的なデータとは言えない。父親が子どもの勉強をみてあげることも珍しくはないし、家族そろっての外出も比較的多い。ここではむしろ、「月に1回よりもっと少ない」という、グラフの右端の数値に注目しておいたほうがいいのかも知れない。

しかし問題となるのは、次の図２に示したように、子どもの学年が上がるにつれて、父親との接触が極端に減るという傾向なのであろう。

食事やテレビなどの場面では、家族の一員として父親がそこに同席していればよい。しかし入浴や勉強など、父と子が文字通り裸になって直接的にふれあう場面は、６年生になると、急激に減少する。

この結果が、そのまま父と子の心理的な距離が遠ざかることは意味しないであろう。しかし、子どもの成長に対して父親の存在が大きく意味を持ち始めるのは、むしろ小学校高学年の頃のはずであった。そうした角度からの検討もまた必要になろう。

なお、性差についても検討してみたが、入浴の項目を除けば、ほとんど差が認められなかった。

図１　子どもといっしょにすること

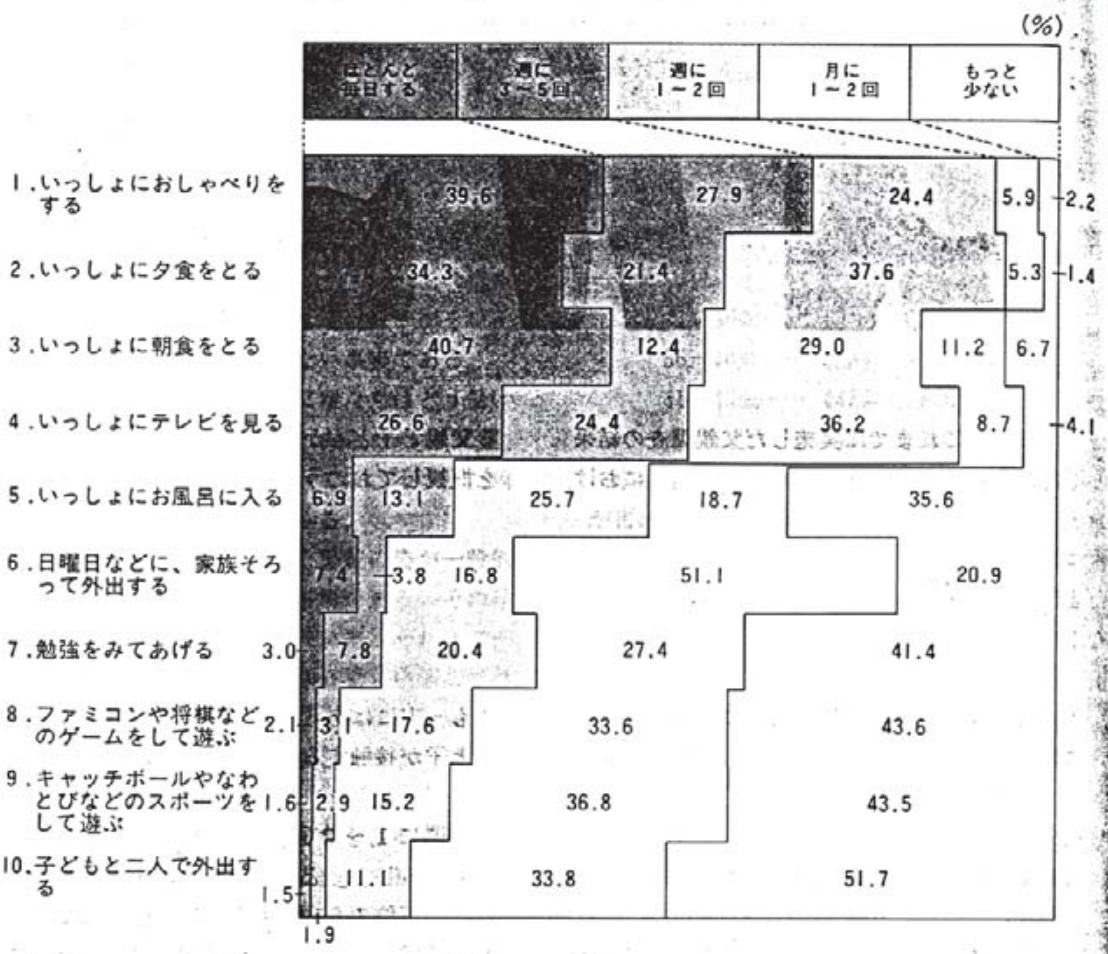
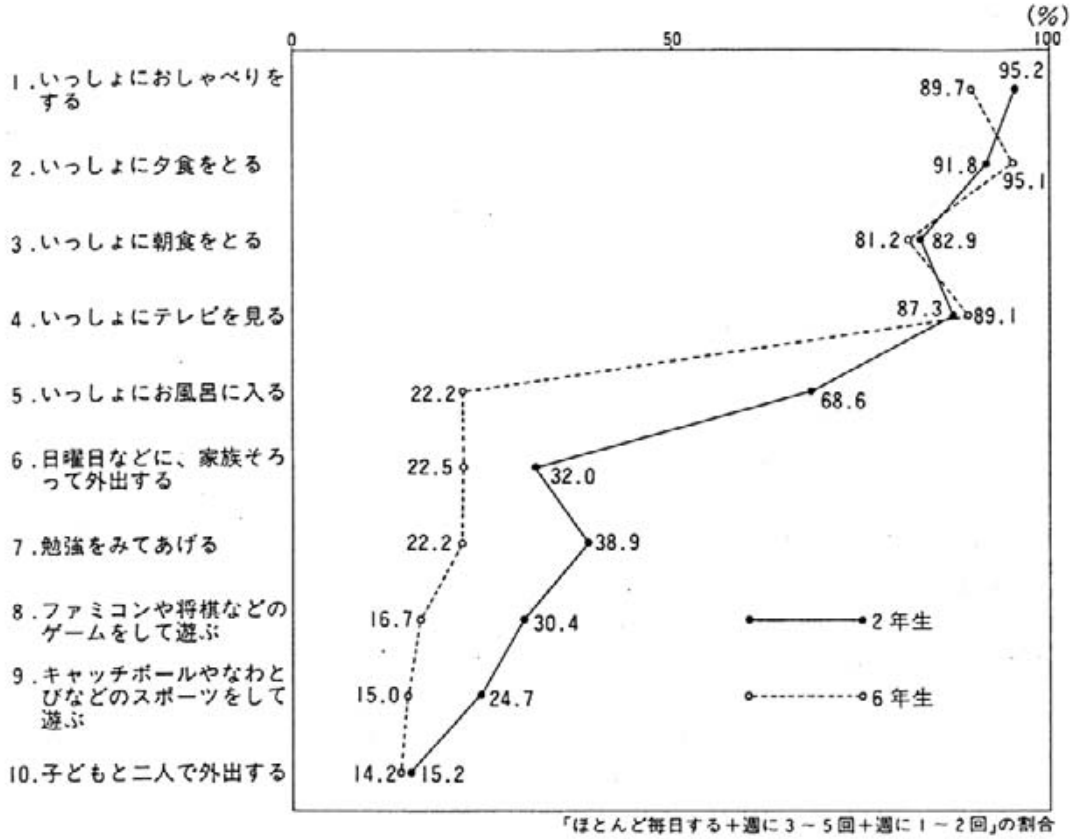


図2　子どもといっしょにすること×子どもの学年



「ほとんど毎日する＋週に3～5回＋週に1～2回」の割合

子どもを知っているか

以上に見てきたような接触状況の中で、父親は、子どものことをどのくらい知っているのであろうか。

その点についての結果を、図3に掲げた。ここでは、「だいたい知っている」までを一応の目安として結果を読み取っておこう。

「通知表の成績」がトップにランクされている点は、いかにも現代の父子関係の一面を象徴しているという気もするが、大半の項目において、父親は子どものことをよく知っていると考えている。

念のため図4には、子どもの側からのデータを掲げた。

全体として、子どもが父親に知ってもらっていると思っている割合は、父親の申告よりいくぶん目減りする傾向にある。とはいえ、両者の言い分にそれほど大きな隔たりはない。父親は、必ずしも子どもの日常についての情報を全てキャッチしているわけではないが、その点については子どもも承知している。

そうした両者の一種の安定した関係が読み取れよう。

ここでも問題となるのは、次の図5に示したように、学年が上がると、父親は次第に子

どもが見えにくくなるという事実であろう。

とりわけ、「今、勉強していること」や「今、悩んでいること」についての数値の低下が顕著である。青年前期にさしかかり、自我の確立しつつある6年生にとっては、実は、その部分が最も周囲の人々に理解してもらいたい点なのであろう。

そうした点で子どもを理解し、その成長をサポートするという役割を父親が必ずしも十分果たしているとは言えない現状がある。

図3　子どものことをどのくらい知っているか

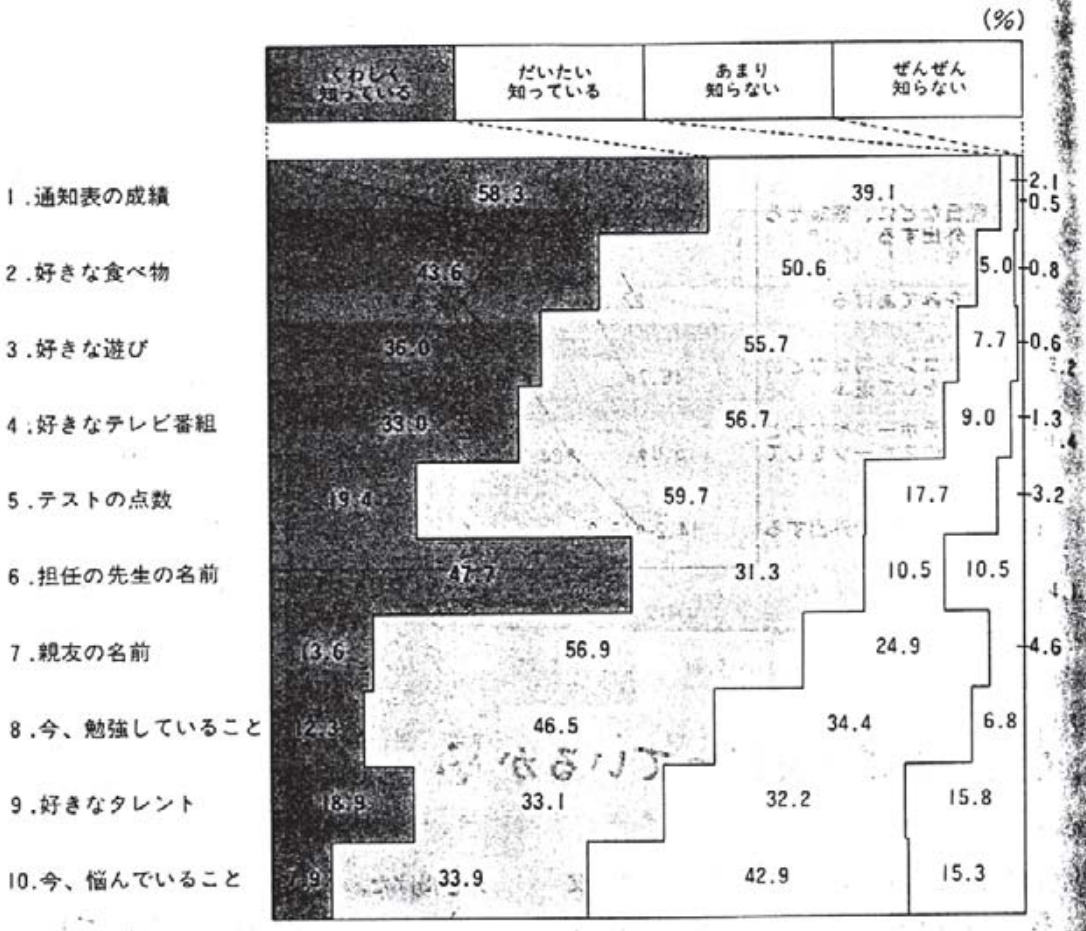


図4　父親はどのくらい知っていると思っているか

「モノグラフ・小学生ナウ vol.4－3 父親」より

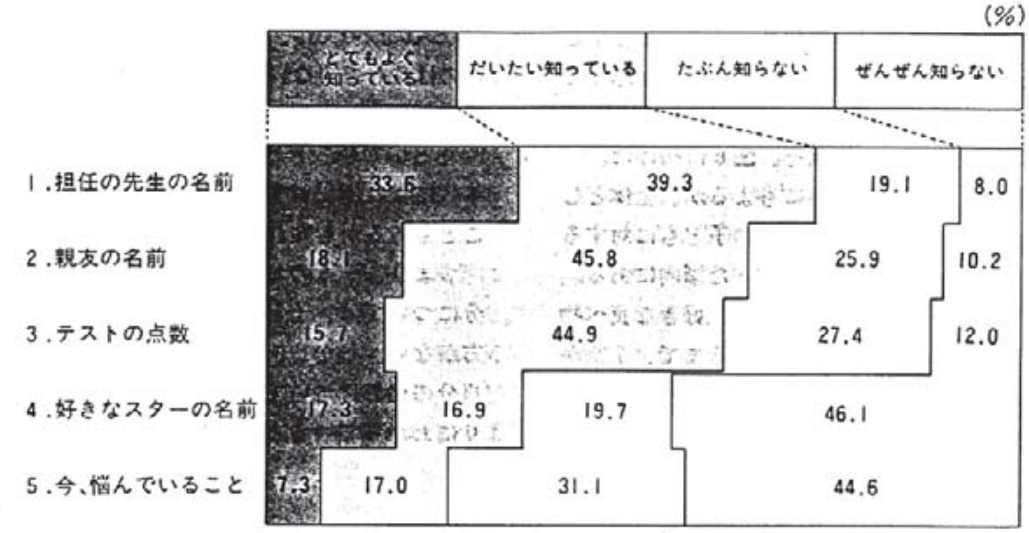
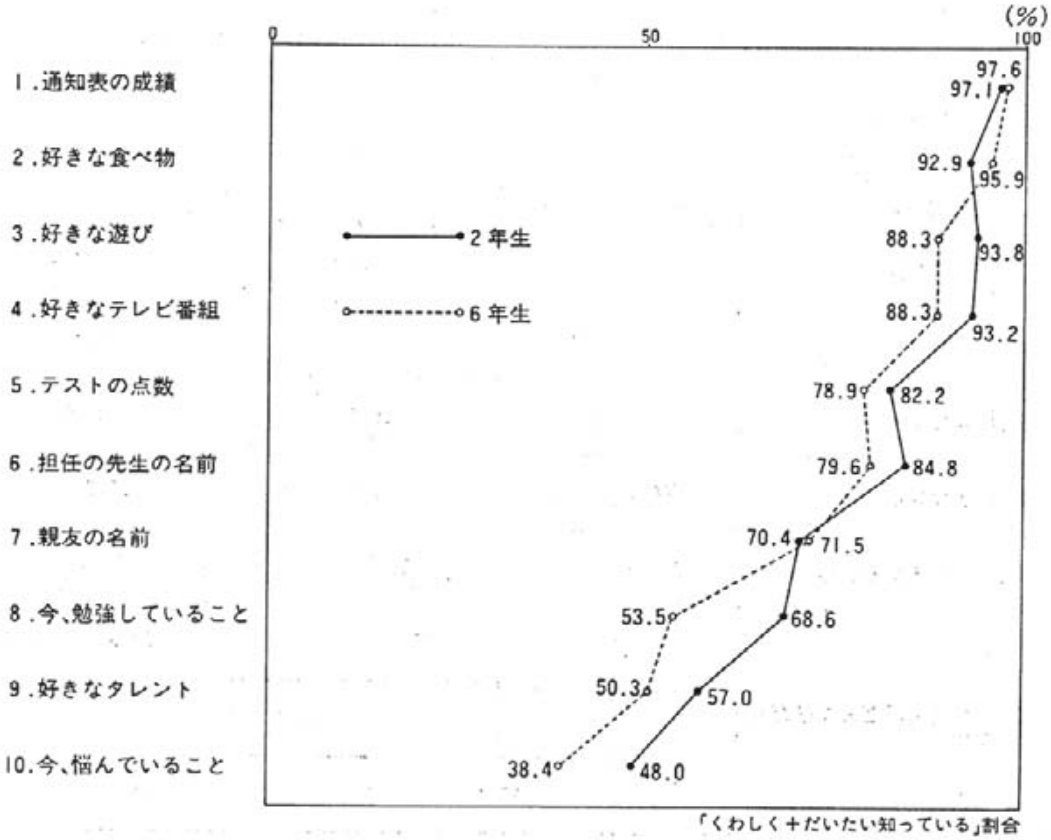


図5　子どものことをどのくらい知っているか×子どもの学年



子どもから知られているか

それでは、逆に、父親は自分のことを子どもがどのくらいくわしく知っていると思っているのであろうか。そうした角度からの問いによって得られた結果を、図6に掲げた。

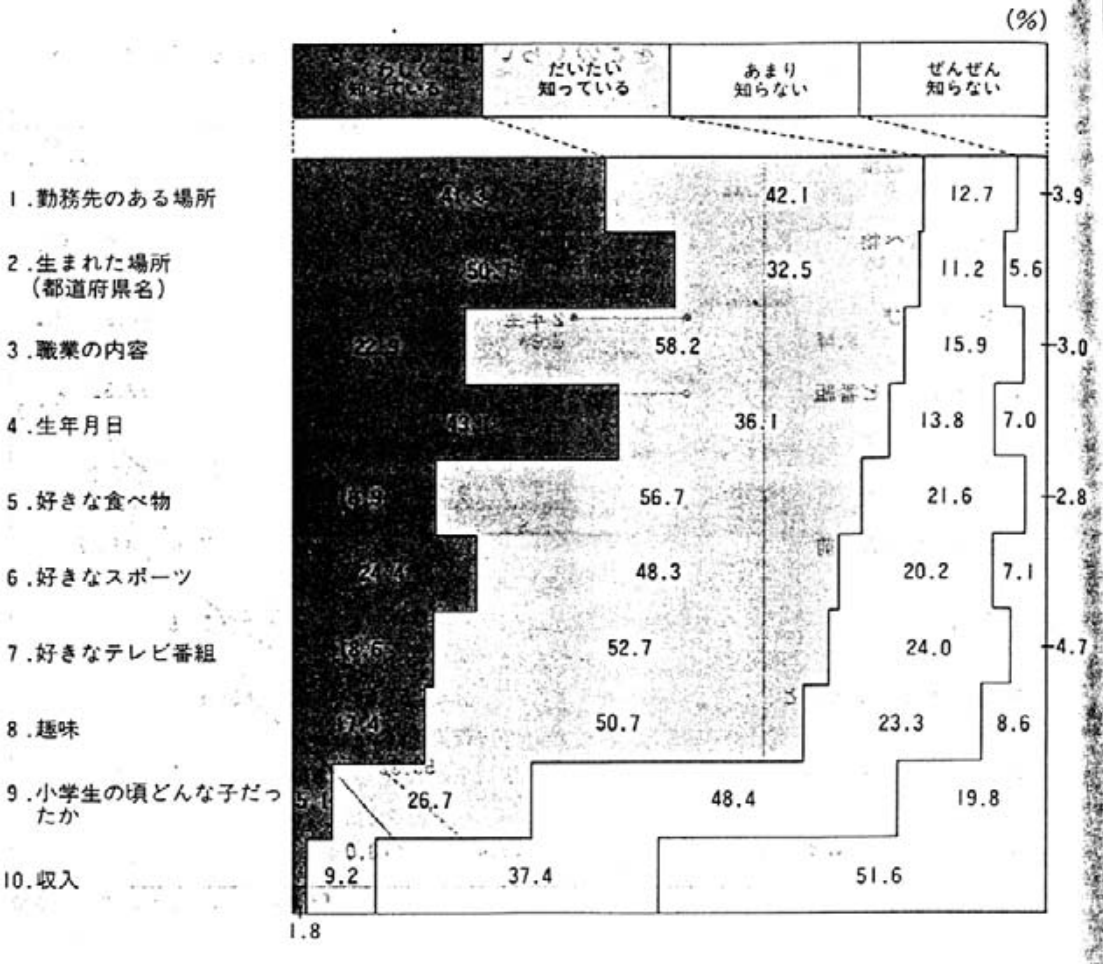
用意した項目の内容にもよるが、全体として、図3に示した父親からの子どもに対する理解の結果と極めて似かよった傾向にある。

勤務先や職業を始めとして、好きな食べ物・スポーツ・テレビ番組に至るまで、7割から8割の父親は、子どもが自分を知ってくれていると考えている。

収入については、子どもの前で話題にしないのはやむを得ないだろう。自分の子どもの頃を引き合いに出して子どもを叱るケースは例外としても、子どもが無理なく吸収できる年代になれば、いずれ自分の少年時代を語ることもあるかも知れない。

つまり、一人のおとなとしての中核的な部分については、子どもたちが知らなくても仕方がない。しかし、家庭の父親として見せる自分の輪郭については、子どもたちはそれなりにわかっていると思っているのであろう。

図6　父親のことを子どもはどのくらい知っているか



さて、これまでと同様に、学年別に処理した結果を図7に掲げた。

全ての項目において、6年生が2年生を大きく上回る。学年が上がるにつれて、子どもは父親のことをくわしく知るようになるというこの結果は、考えてみれば極めて自然である。

しかし、図5、すなわち父親から子どもへ向ける視線の結果と対比すると、興味深い事実が浮かんでくる。

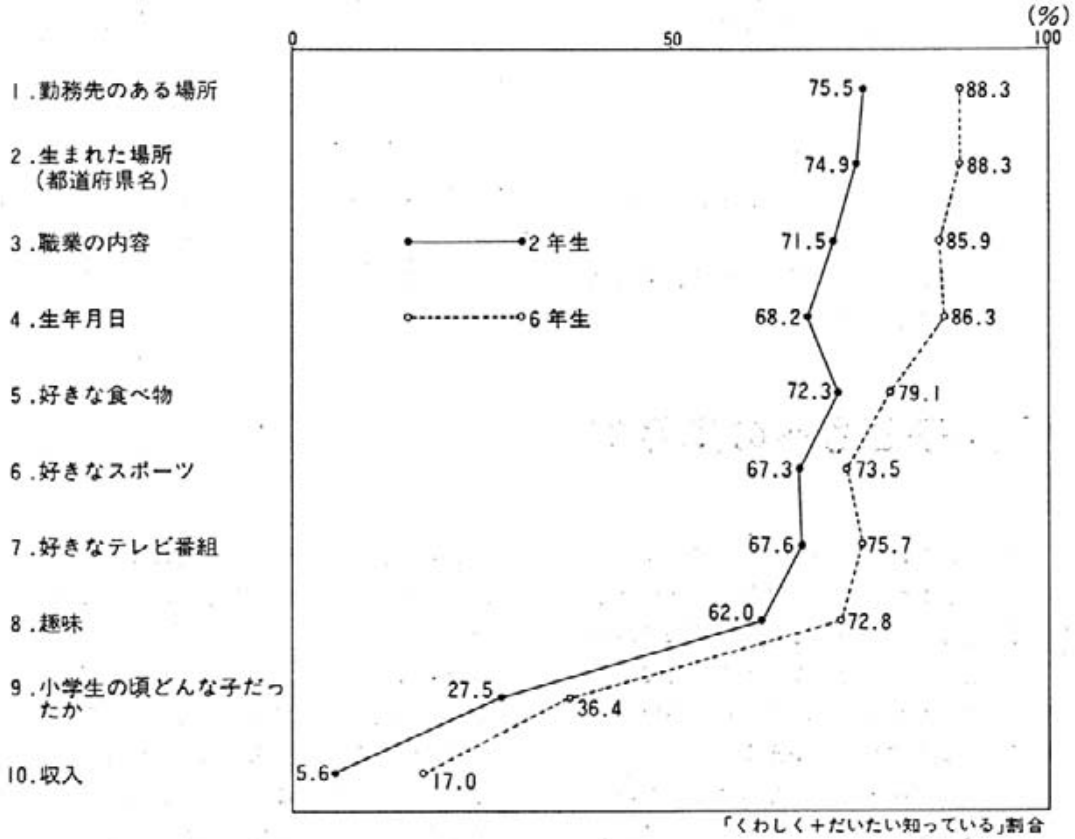
子どもの発達は、一方では、父親の視界に子どもが留まらなくなることを意味していた。しかし、その一方で、子ども自身は次第に父親を自分の視界内にとらえるようになる。子どもの成長が父子関係に及ぼす影響のひとつは、こうした現象となってあらわれるのであろう。

もちろん、かつての父子関係に、こうした関係が見られなかったという保証はない。考えられることは、かつての父親は、あるいは今ほど子どもをつぶさに観察はしていなかっただろうということくらいである。

したがって、これまでのデータが物語ってきた父子関係の一面は、必ずしも現代に特有の状況とは言い切れない。

しかし、要は子どもとの関係に、いわばすれちがいとでも呼べるような状況が存在していることを、父親自身が自覚しているという点である。その点を前提として、以下のデータを読み取ると、現代の父親像に特徴的な一面が見えてくるかも知れないと思う。

図7　父親のことを子どもはどのくらい知っているか×子どもの学年



2. 子どもへの評価

学年が上がるといくつもの「きしみ」が見え隠れするとはいうものの、現在のところ思った以上に順調な父子関係が保たれていた。

それでは、もう少し立ち入って、父親たちは自分の子どもの性格や能力をどのように見つめているのであろうか。そして、周囲にいる子どもたちの中で、わが子に対する評価はどのような位置を占めているのであろうか。

本章では、父親の眼に映るわが子の像に焦点をあててみよう。

子どもへの満足度

まず、図8は健康から学力までの4つの面について、わが子の現状に父親がどれほどの満足を感じているかをとらえた結果である。

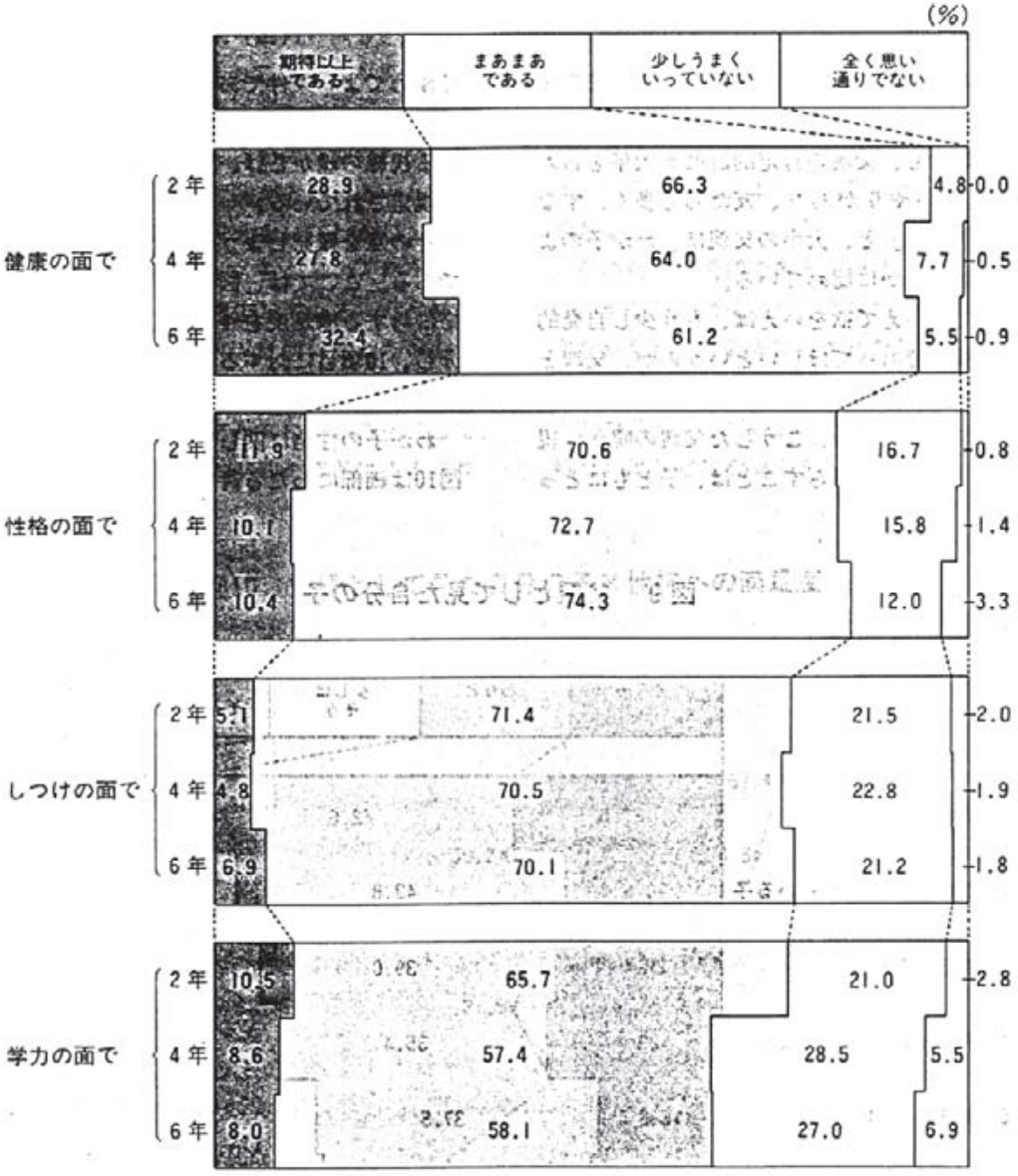
全体として、肯定的な回答をした父親が大半を占め、わが子の現状に父親はかなり満足しているようすがうかがえる。

しかし、健康・性格・しつけ・学力の順に満足度は次第に低下していく。そして、ほぼ3分の1の父親は、わが子の学力についてはかなりの不安を抱いている。

さらに、子どもの学年発達による差が最も顕著であるのは、やはり学力に関してであった。

以前に、全く同じ設定で、母親の子どもに対する満足度をたずねたことがあった。データは省略するが、結果は父親の場合とほとんど同じであった。この事実は、父親が決して子どもを過大評価しているわけでもなく、逆にまた必要以上に悲観的に見ているわけでもないことを示唆している。

図8　子どもへの満足度×子どもの学年



わが子をどう見ているか

次の図9は、10項目におよぶ性格特性を用意し、わが子への評価を求めた結果である。

ここでも、父親の肯定的評価が大半を占める。「思いやりがあり、友だちも多く、すなおで明るい」と、大半の父親は、わが子のよさをおおらかに認めている。

ただ、あえて欲をいえば、もう少し自発的で積極的であってほしいというのが、父親としての子どもに対する数少ない注文である。

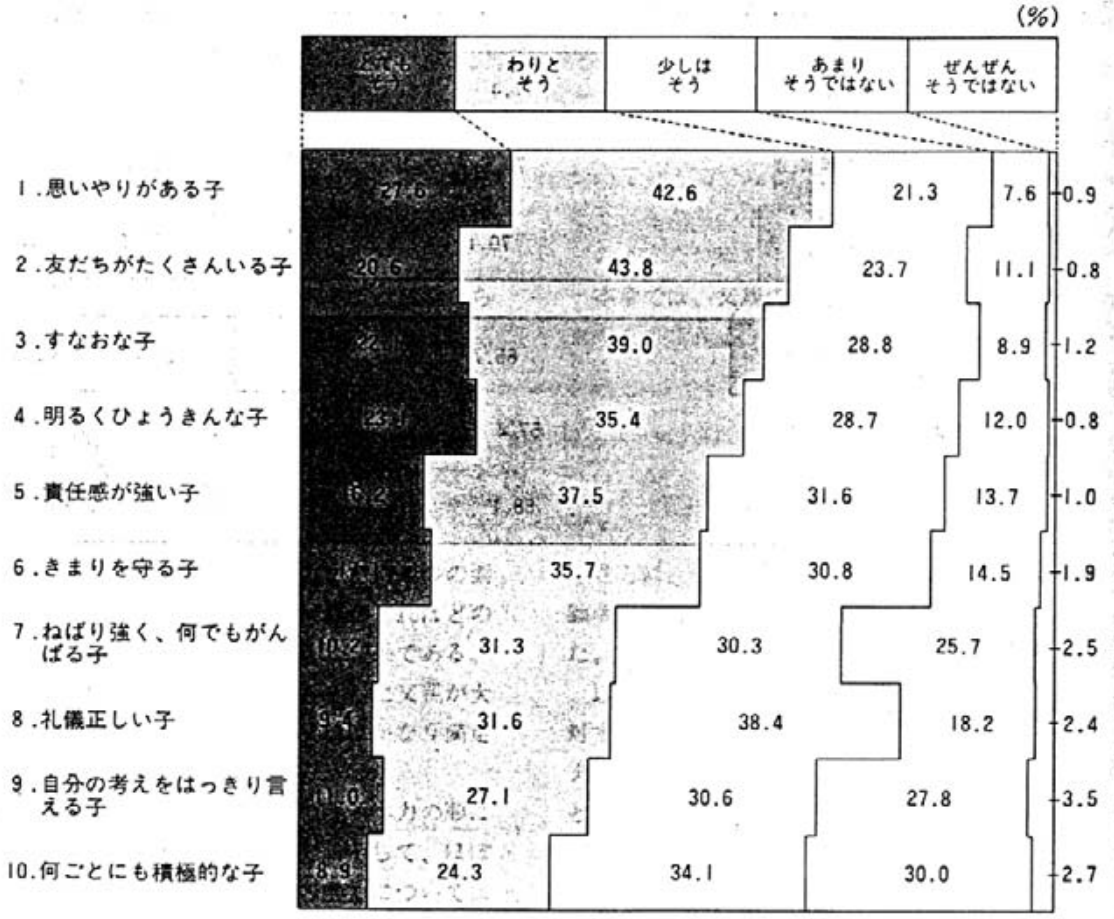
いずれにしても、こうした父親の暖かい視線を受けながら暮らすことは、子どもにとって極めてよい条件である。

しかし、当然のこととはいえ、わが子に向ける視線の暖かさは、子どもへの満足度に強く規定されている。

その点を確認しようとしたのが、次の図10である。ここでは、図8に示したわが子の性格に対する満足度をキーにしてサンプルを三分し、10項目に対するそれぞれの反応をまとめてある。

わが子の性格に関して、図8は総合的評価、図10は細部にわたる評価という関係にあるの

図9　父親として見た自分の子



で、ここで両者の強い相関関係が認められるのは当然のことといえよう。

しかし、子どもの学力への満足度をキーにしたクロス集計の結果（図11）にも、三群の間に顕著な差が認められるという事実をどう解釈すればよいのだろうか。

明るさやひょうきんさを除く他の性格特性と学力との間に強い相関がある、という解釈もそれほど強引とは思えない。しかし、わが子の学力への満足度が、その子の人格全体に対する評価をかなり規定しているという解釈も、あながち的はずれとは言い切れない。

そのいずれであるかの判定は、さらにいくつかのデータを加えてからにすることにして、ここでは、もうひとつ父親の年齢によるクロス集計の結果を紹介しておきたい。

冒頭にも示したように、本調査のサンプルの大半は、30代後半から40代前半の父親たちによって占められ、その前後におよそ10%ずつの年代層が存在している。

ここではあえて、その10%ずつの2つの層の父親たちに注目するが、その理由のひとつは、世代間較差をよりクリアにとらえるためである。

その結果が図12である。一見して両群の間に、かなり顕著な差が認められる。46歳以上、すなわち戦前・戦中に生まれた父親の多くは、相対的にとはいえ、わが子に対してかなり肯定的な評価をしている。その一方で、若い父親たちはシビアな見方をしている。

図10　父親として見た自分の子×性格への満足度

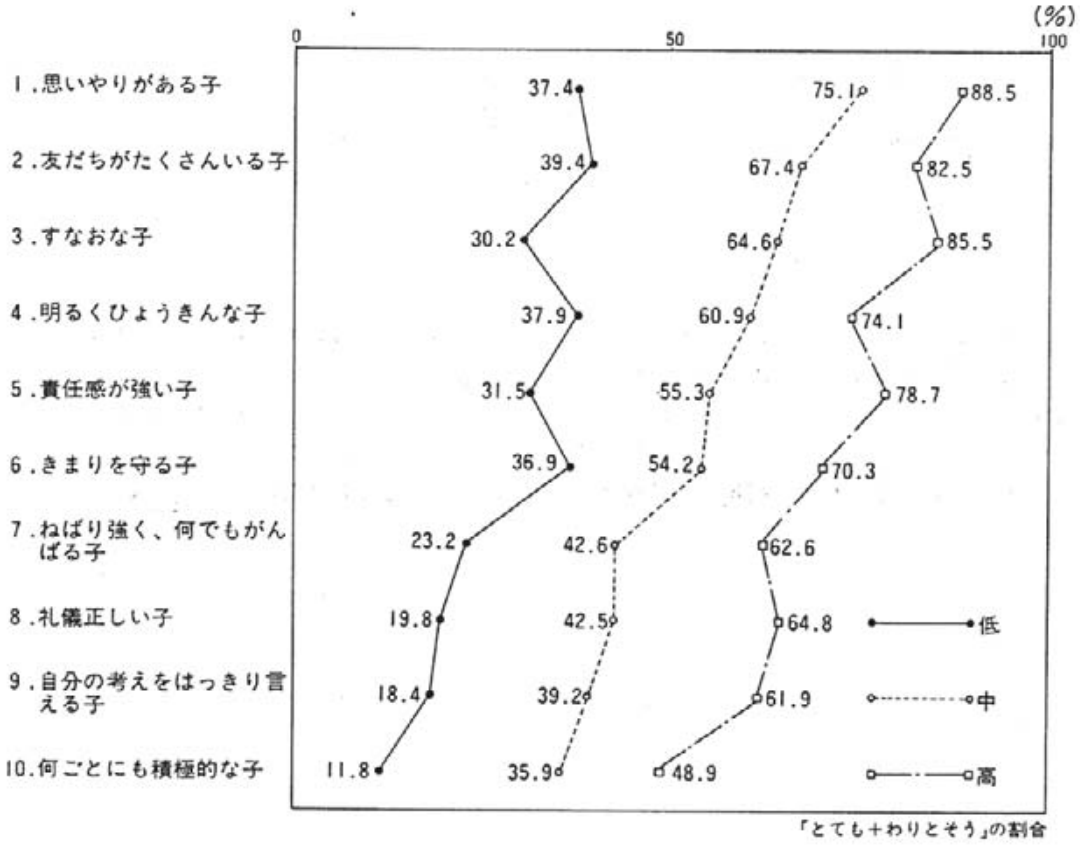
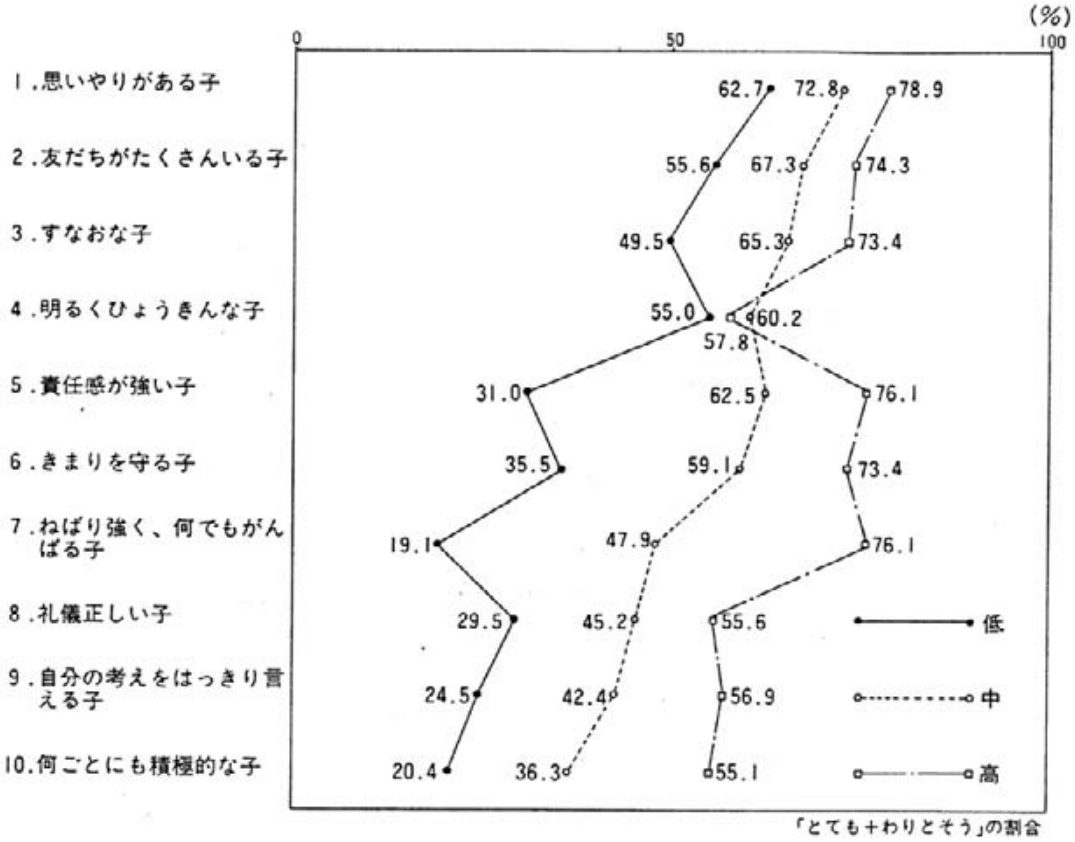


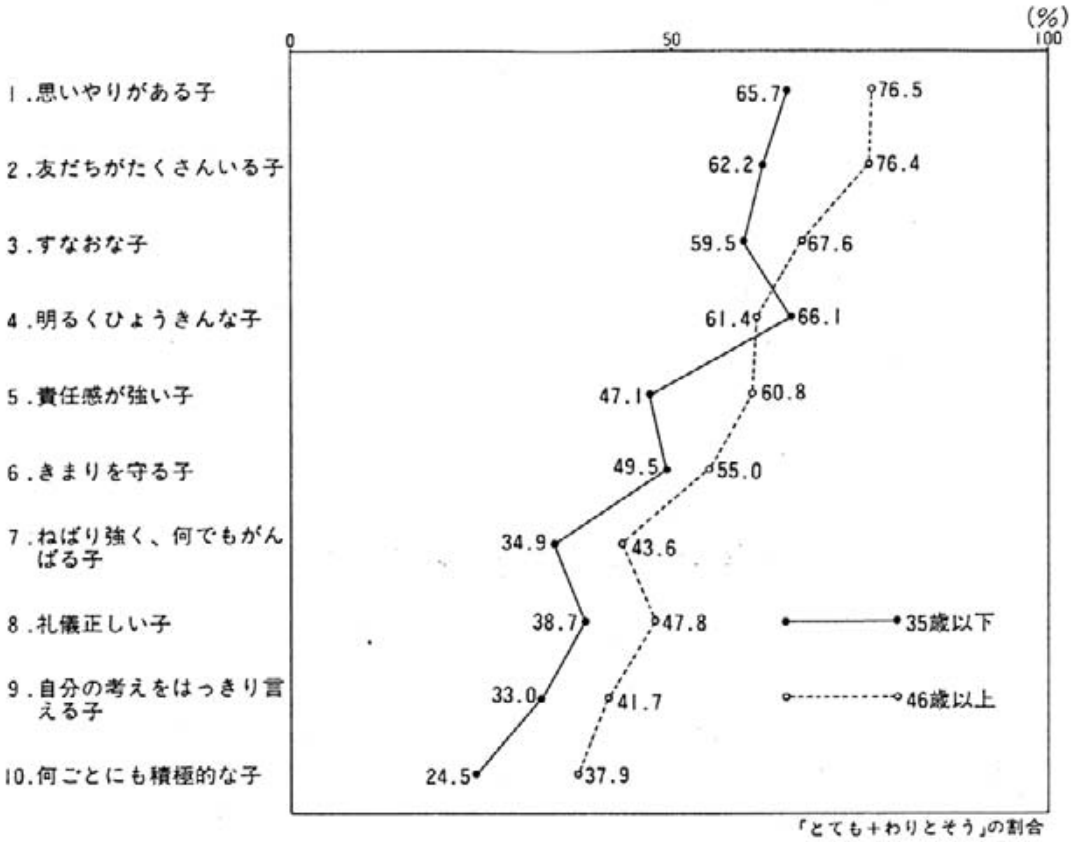
図11　父親として見た自分の子×学力への満足度



例えば、「明るくひょうきんな子」の数値の高さが象徴するように、最近の子どもたち自身が描く自己像のプロフィールは、どちらかといえば若い父親たちがわが子に対して描くそれに近い。とすれば、高年齢の父親たちは、わが子に対して少々楽観的であるのかも知れない。

いずれにしても、父親の世代によって、わが子のイメージがこれだけ異なる点に、ひとまず注目しておきたい。

図12　父親として見た自分の子×年齢



周囲の子をどう見ているか

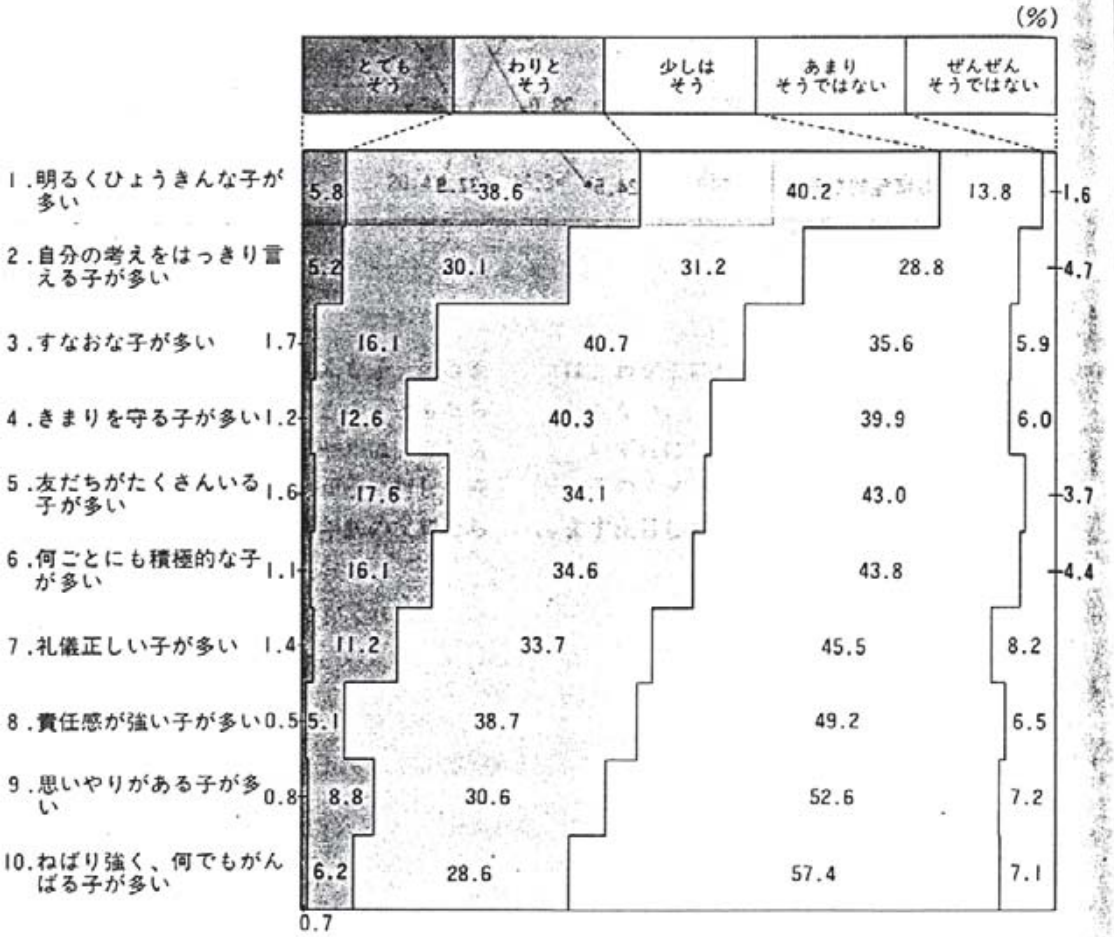
次に、わが子から目を転じて、最近の子どもたち一般に対して、父親はどのような見方をしているのであろうか。この点について明らかにする作業は、あらためて父親の中にあるわが子のイメージを確認する意味をもつはずである。

図13に、まず単純集計の結果を掲げた。ここでは調査項目の末尾に、「～が多い」と加えたため、全体として否定的なニュアンスの回答が多かった。その点を割り引くとしても、前の図9に示したわが子に対する評価に比べて、かなりトーンダウンする。

すなわち、最近の子どもたちには、一般的にいって、かなり問題があると父親たちは見ている。しかし、その中にいるわが子は、結構がんばっていると考えているのである。

重ねて言えば、父親がわが子に対してこうした見方をすることは、むろん悪いことではない。ただ懸念されるのは、あるいは、父親がわが子の実像を的確に把握できていないの

図13　最近の子どもたちへの評価



ではないかということである。さらに考えられるのは、わが子の性向に少々問題があることは承知しながら、父親としての包容力が好意的な見方を支えているのかも知れない、ということである。

そのいずれであるかの判定はかなり微妙な問題である。さらにいくつものデータを重ねながら、検討する必要があろう。

さて、それでは周囲の子どもたちに対する見方とわが子への評価が、どういう関係にあるのだろうか。その点を探ろうとしたのが、次の図14である。

ここには、わが子の性格への満足度をキーにしたクロス集計の結果を掲げてある。

全体として、わが子に対する評価と周囲の子どもたちに対する評価の間には、強い相関が認められる。

さらに、父親の年齢との関係を見た図15によれば、高年齢の父親ほど、周囲の子に対する評価が高いことがわかる。すでに見てきた図12では、自分の子どもに対する評価も同様な傾向にあることが示されている。

これらのデータを総合すると、どうやらわが子も含めた子ども全体に対して、悲観的・否定的な見方をする層と楽観的・肯定的な見方をする層とが存在することがわかる。そして、高年齢の父親たちの多くが、その楽観派に属すると考えてもよさそうである。

図14　最近の子どもたちへの評価×わが子の性格への満足度

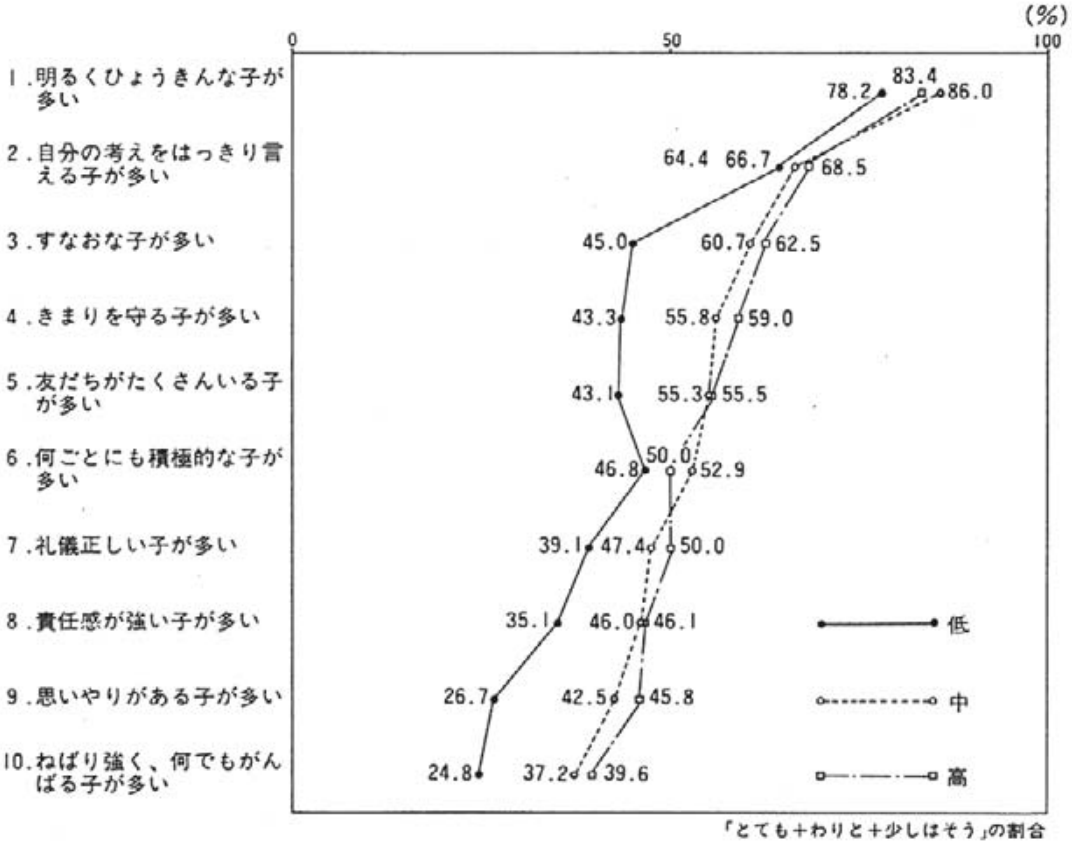
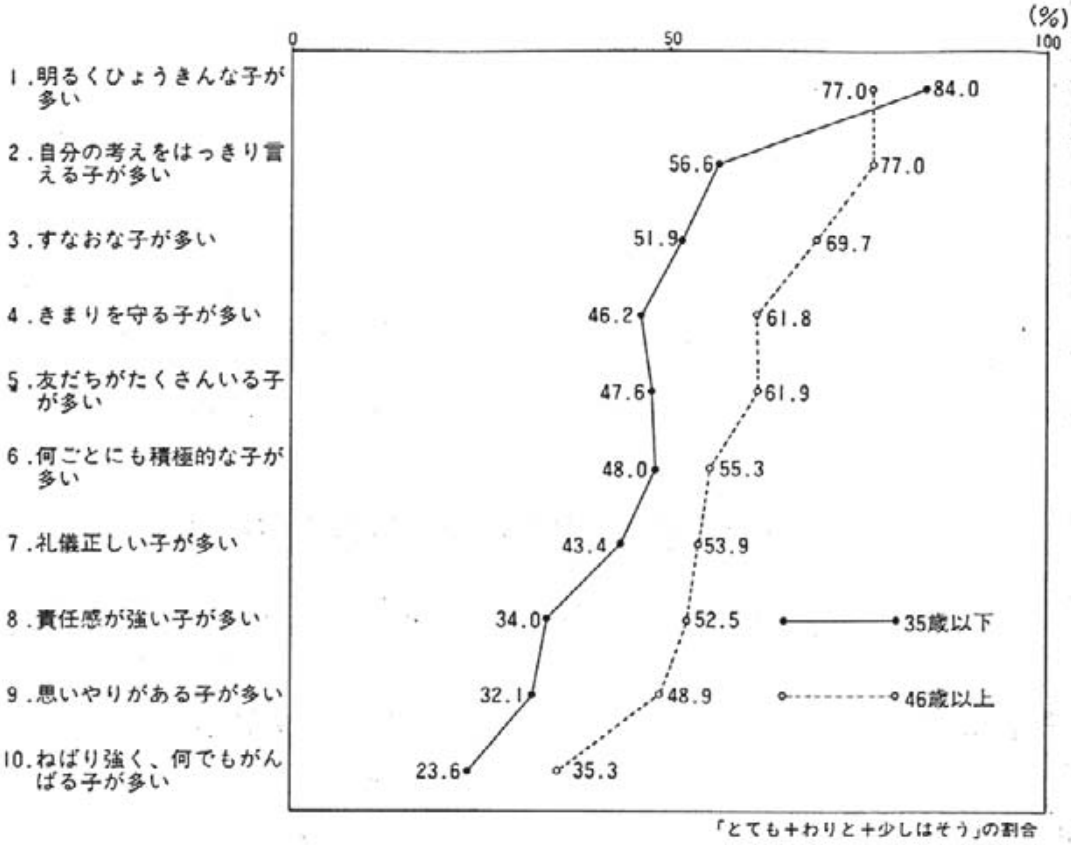


図15　最近の子どもたちへの評価×年齢



3. 父親としての教育的対応

前章で父親のタイプを楽観派と悲観派という枠組みでとらえようとしたのは、その背後に、父親が必ずしも子どもの現実に立っていないのではないかという疑問があるからである。

例えば、子どもの学級担任と直接的に接触するのは、母親であることが多い。また、忘れ物のチェックや学校への諸連絡など、子どもの日常的なしつけや教育については、主として母親の役割であると見なされてきた。

そうした風潮の中で父親たちは、実際にどのように対応しているのだろうか。

本章では、そうした観点から父親の姿を探ることにする。

しつけへの参加

図16は、子どものしつけに関する10項目について反応を求めた結果である。

上位には、「叱る」「ほめる」などの項目が位置している。子どもに対するこうした対応は、一種の行動規範を形成する重要な機能をもつと考えられよう。

子どもの日常的な生活や行動にあれこれと注意を与えるのが母親であり、父親は肝心なところでピシャとやる。そうしたやや古典的な夫婦間の役割関係を思い起こせば、昔も今もその関係は意外に変わっていないという印象を受ける。

一方、子どもの自主性や人格を尊重するという、いわば民主的な対応は、下位に位置し

ている。とはいえ、そうしていない父親の比率はかなり低率になっていて、父親が次第に叱るだけの役目ではなくなってきている雰囲気も一方にはある。

果たして、父親は変わったのか。そうしたテーマにひとつの回答を与えてくれるのが、父親の年齢別のデータであろう。図17がそれである。

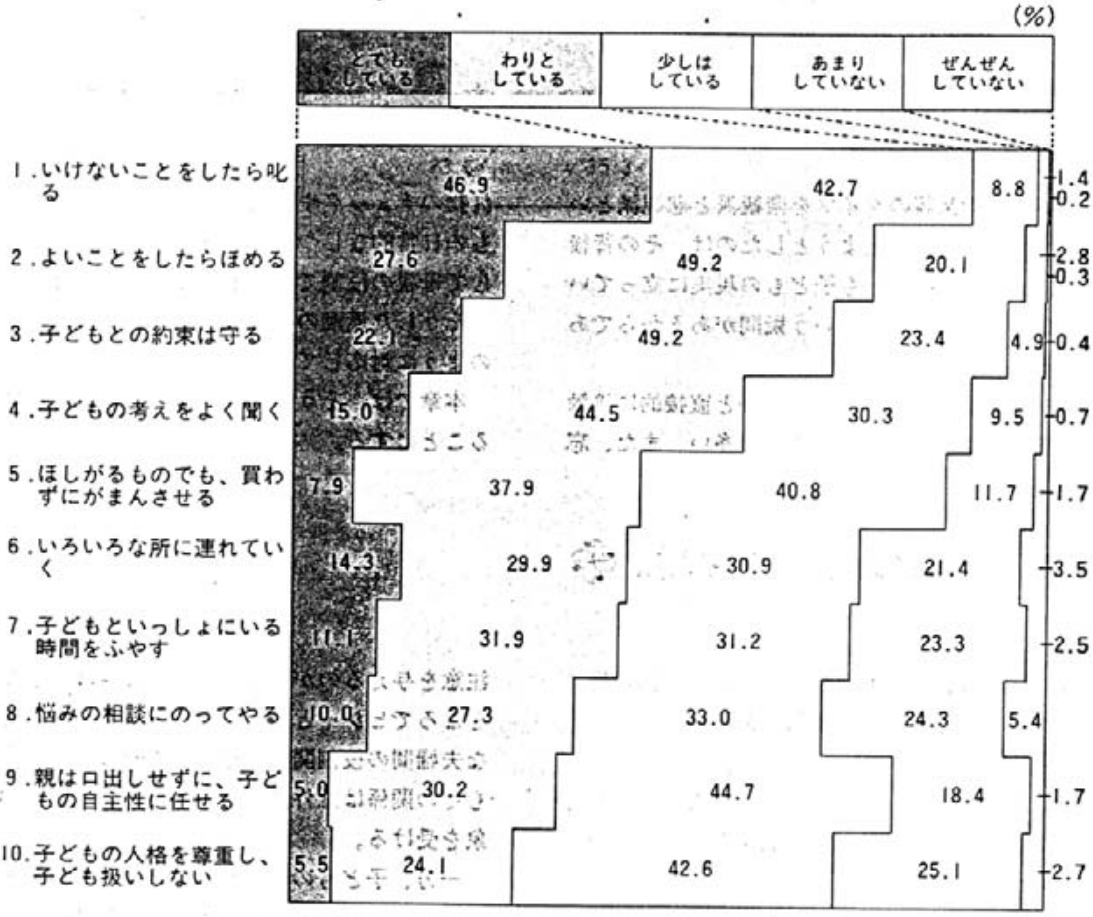
それぞれのサンプル数が100を少し超える程度であったから、厳密な比較は難しいが、上位と下位の項目にかなり大きな差が認められる。そして、それらを合わせて解釈すると、子どもをよく叱るのは若い父親であり、子どもの自主性や人格を尊重するのは、むしろ高年齢の父親たちである。

この関係は、逆ではないかという印象を受ける。厳父・慈母と形容されるかつての明確な役割関係から同質化へという大きな変化の方向を念頭に置けば、むしろ子どもにやさしく対応するのは、若い父親であっていいはずである。

表示の都合で、両者の中間に位置する30代後半と40代前半の父親たちのデータは省略したが、例えば、「いけないことをしたら叱る」という項目に関する数値を紹介すると、次の通りである。

35歳以下 —— 93.4%
36～40歳 —— 90.6%
41～45歳 —— 86.8%
46歳以上 —— 84.1%

図16　しつけへの参加度



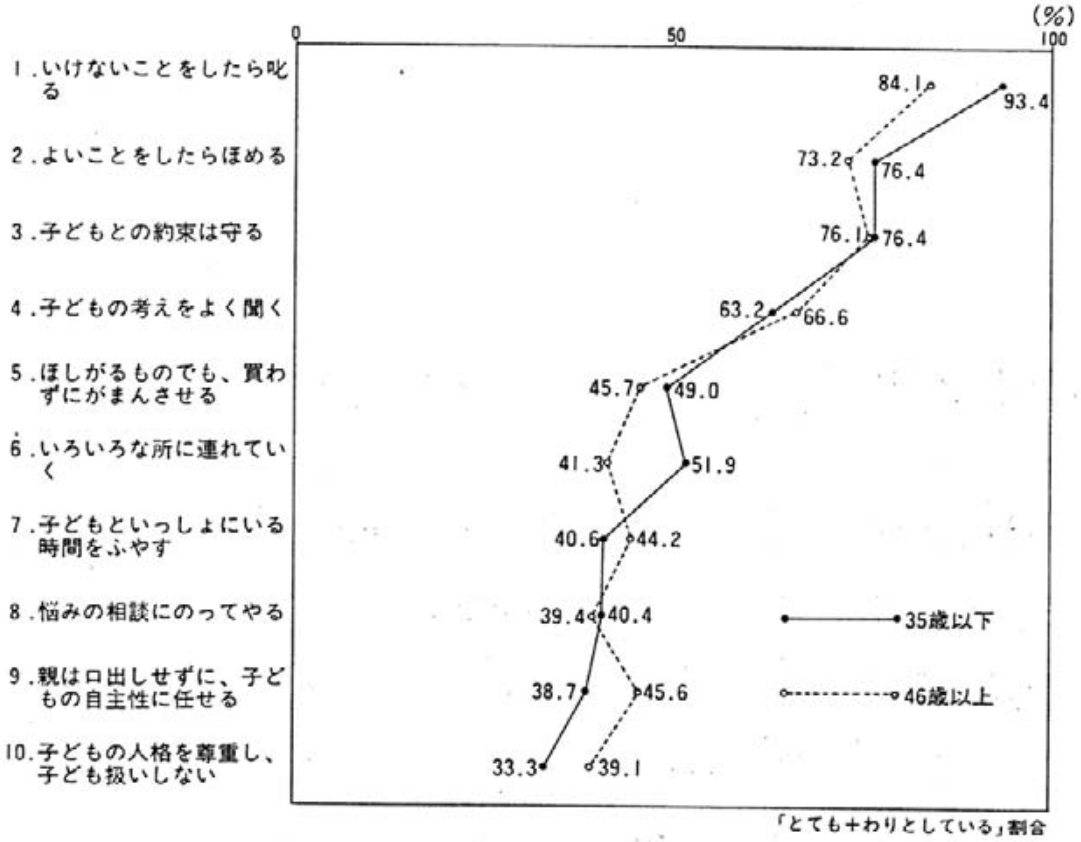
つまり、父親は次第に、そして確実にきびしさを増していることになる。

考えてみれば、46歳以上、すなわち戦前（といっても大半は直前であるが）・戦中に生まれた父親たちは、戦後の民主教育が台頭する真っ只中に少年期を過ごしている。価値観が大きく揺れ動いた時代の前と後をともに生きてきている。したがって、それまでの厳父というイメージを捨て、民主的な父親像を目指したのは、実は彼らだったのではないだろうか。したがって、本調査のサンプルとなった父親たちは、いずれも大きなスケールでの変化をした後の父親像を示していると考えることができる。

そう考えれば、図17が示している傾向は理解しやすい。端的に言えば、かつての父親像への回帰が始まったのである。しかし、時代的な状況は大きく変わっている。少なくとも核家族化に象徴されるように、家族をめぐる事情は一変した。かつての父親たちは、個人的な努力や人柄よりも、むしろ制度や慣習を支えとして父親像を形成していたはずである。

とすれば、かつての父親像がよみがえる余地はほとんど残っていない。そこに、新しいタイプの父親像の出現が予感される。

図17　しつけへの参加度×年齢



教育的行動

ここまで読み取ってきたのは、子どもに対する父親としての日常的な対応であった。もう少し枠を広げて、父親の教育的な行動について確かめてみよう。

まず図18は、用意した8つの行動について、その頻度をたずねた結果である。

若い父親が顕著に上回る項目は、「授業参観に出席する」「近所の子どもと遊ぶ」の2つである。それに対して、高年齢の父親は、「教育関係の記事を読み」「教育関係の書物を読む」ことに特徴がある。

端的にまとめれば、「行動する父親」と「考える父親」といった対照的な趣きがある。

その傾向は、教育に対する意見をたずねた結果（図19）にも示されている。

両者がほぼ一致するのは、「人に迷惑をかけないようにする」「今の家庭教育には問題が多い」の2点だけで、他の項目については、いずれも高年齢の父親が高い数値を示している。彼らは、子どもの教育をめぐる事情に強い問題意識をもっている。しかし図18の結果と合わせて考えれば、それが、やや観念的・抽象的である感じは否めない。

それに代わって、それほどの問題意識は持ち合わせていないが、とにかく行動することを身上とする新しい父親が登場した、と言えそうである。

そうした動向を視野に入れながら、以下では、とりわけ若い父親たちのデータに注目していきたい。

図18　父親の教育的行動×年齢

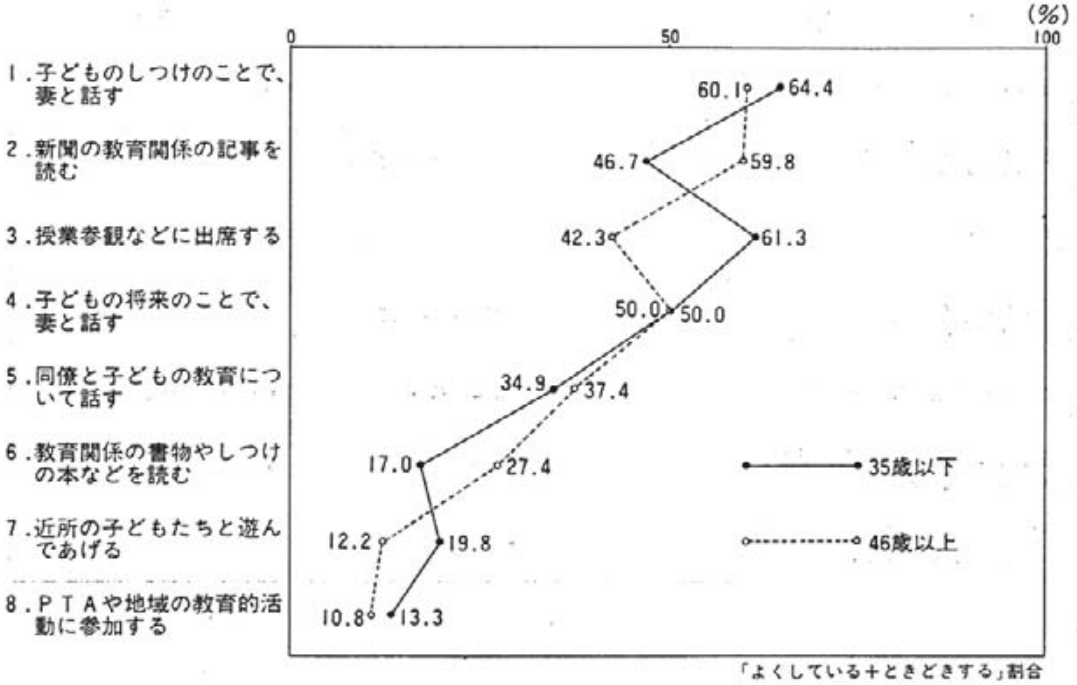
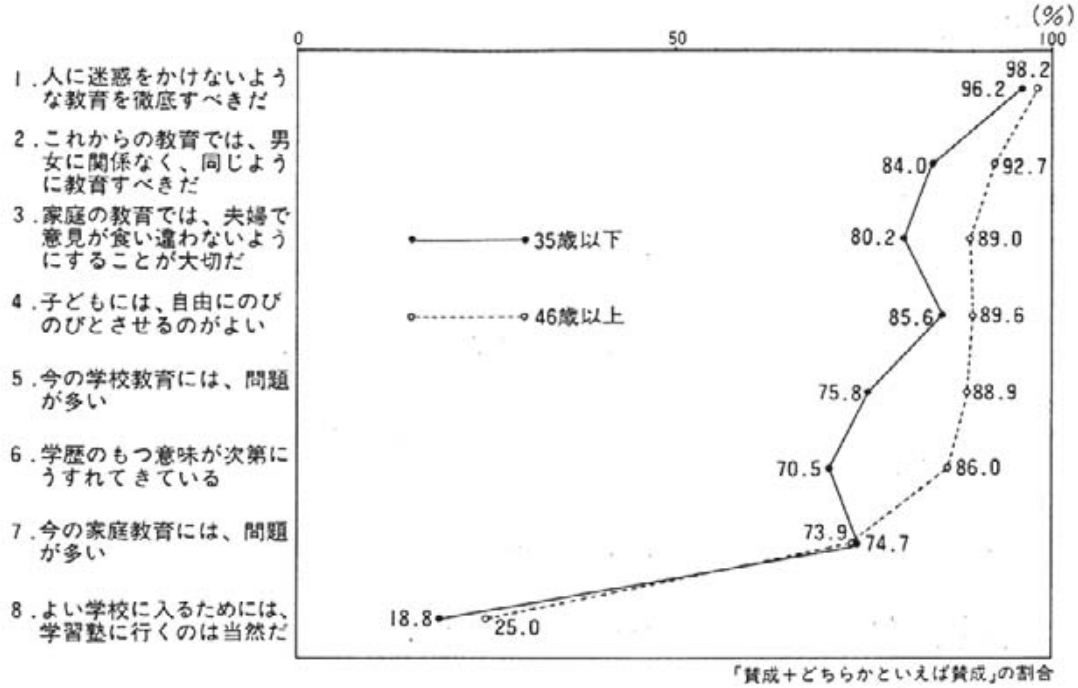


図19　教育に対する意見×年齢



子どもの将来への期待

図20は、わが子の将来に対して、父親たちがどのような期待を抱いているかをたずねた結果である。

全体として、上位・下位それぞれ5項目ずつの間に、大きな落差がある。父親たちは子どもに対して、総じて職業的な達成よりも個人的な生活の充実を願っている。それが、現代の父親に共通する子どもへの期待なのであろう。

そして、個人的な生活という枠の中でも、とりわけ家庭を大切にするという方向に、若い父親たちの願いが描かれている。

念のため、図21には性別の結果を掲げてある。

それによると、さすがに下位の4項目、すなわち職業的達成への期待は、男の子に対して高い。そして、女の子に対してはと言えば、やはり家庭を大切にしてほしいと願っている。しかし、基本的には上位の項目と下位の項目との関係は変わらない。むしろ項目5に見られるように、女の子に対しても、生きがいを感じられる仕事につくことを期待するようになったという事実に、注目しておいてよいのかも知れない。

次に、図22から子どもへの学歴期待の状況を読み取っておこう。

高学歴化の時代を反映して、さすがに4年制大学まで進ませたいと考える父親が圧倒的である。

しかし、例えば短大以上の比率に注目すれば、そうした期待は父親の年齢が下がるにつれて、次第に薄らいでくる。そして、35歳以

下の父親が「せめて短大までは進ませたい」と思う割合は7割にとどまっている。

かつて父親たちが、せめて子どもには自分以上の学歴をと願っていた時代があったはずである。それは、何よりも学歴のもつ重みを思い知らされる現実があったからである。とりわけ、「モーレツ社員」と称され、わが国の高度成長を根底から支えていた世代には、そうした思いが強かったのであろう。

おそらく本調査のサンプルとなった父親たちは、その次の世代なのだろう。経済成長はほぼ横ばいとなり、産業構造は大きく変わった現在において、もはや大きな職業的達成は望めそうにもない。

そうした時代的背景が、ここまでに読み取った父親の願いに色濃く反映したと見ることはできないだろうか。

図20　子どもの将来に期待すること×年齢

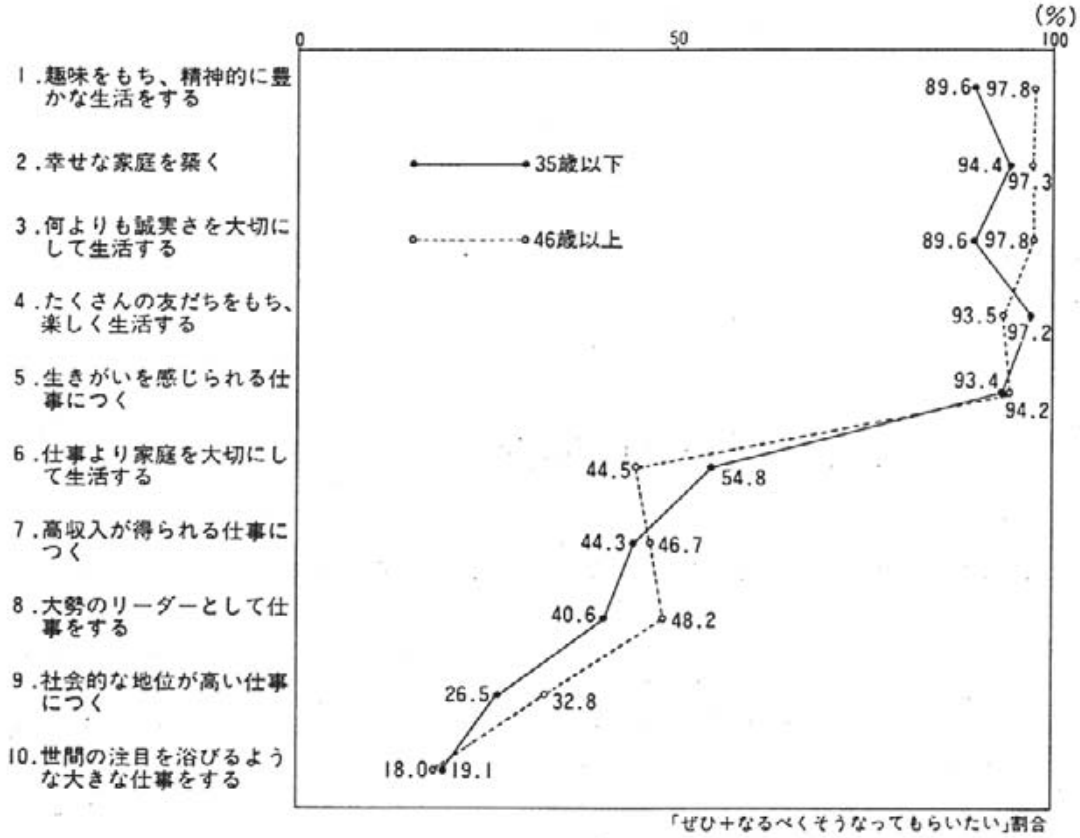
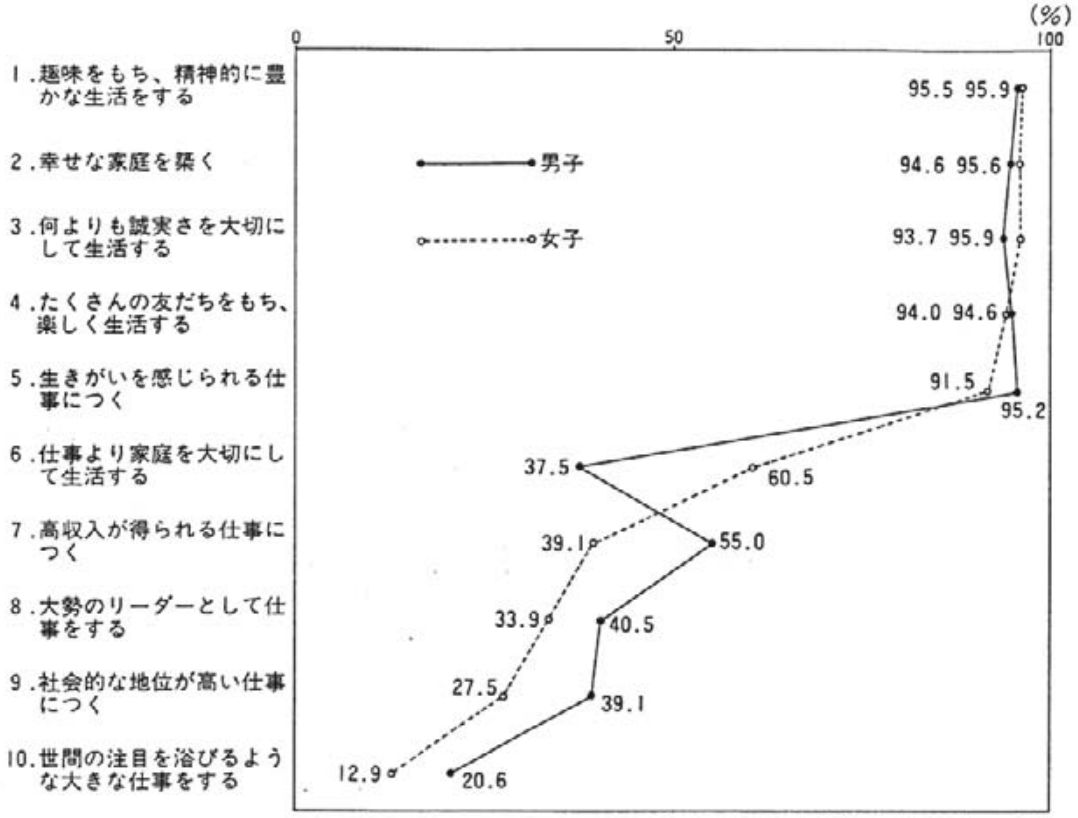
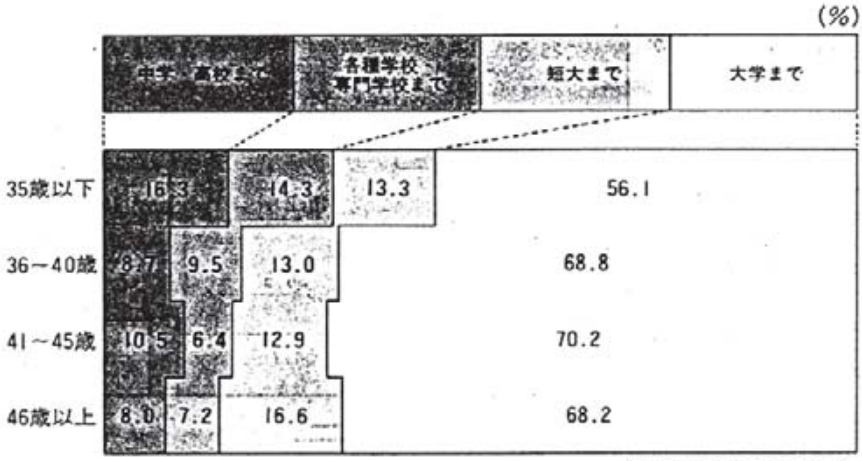


図21　子どもの将来に期待すること×子どもの性



「ぜひ＋なるべくそうなってもらいたい」割合

図22　子どもへの学歴期待×年齢



（その他）を除いて算出した

父親の役割意識

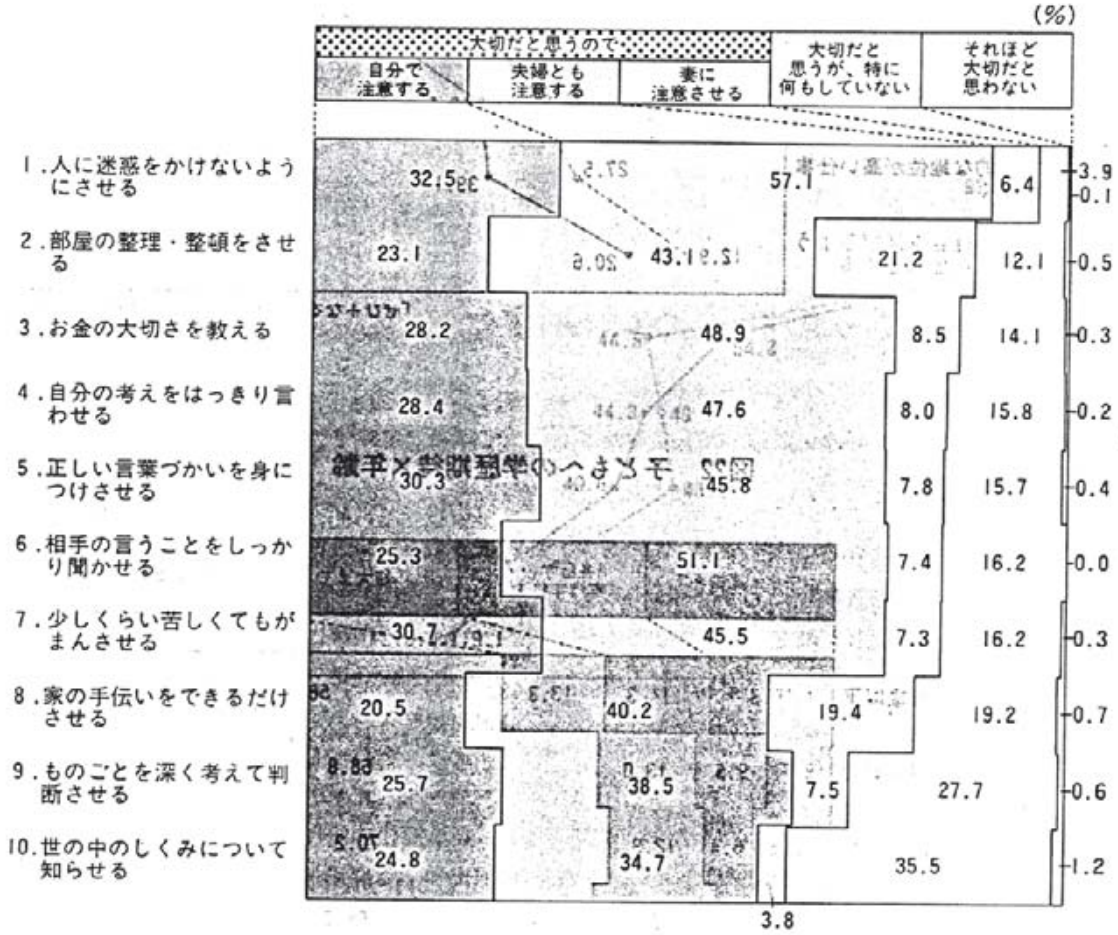
本章の最後に、家庭教育の中で、父親がどのような役割を果たそうとしているかを確かめておこう。

図23は、家庭でのしつけに関する10項目について、大切さの度合いと役割意識を合わせてたずねた結果である。

まず、用意した10項目の大半が、家庭でのしつけとして大切であると判断され、加えて父親としての何らかの対応がされていることが読み取れる。そして、全てのことがらについて、2割から3割の父親が「自分で注意する」と積極的な姿勢を示している点が注目される。

さすがに、「部屋の整理・整頓」や「手伝い」といった日常的なしつけに関しては、「妻に注意させる」といった割合が高くなってい

図23　しつけの大切さと役割分担



る。しかし、そこでもほぼ同じ割合で、自らが注意するという父親も存在する。

全体として、子どものことは妻に任せるといった風潮は、ほとんど影をひそめていると考えてよいだろう。

さて、この結果から「特に何もしていない」と「大切だと思わない」という部分を除いて、役割分担の仕方のみに注目した結果が次の図24である。したがってこのデータはそれぞれのことがらを大切だと思っている父親が、妻との役割関係をどのように考えているかを示す。

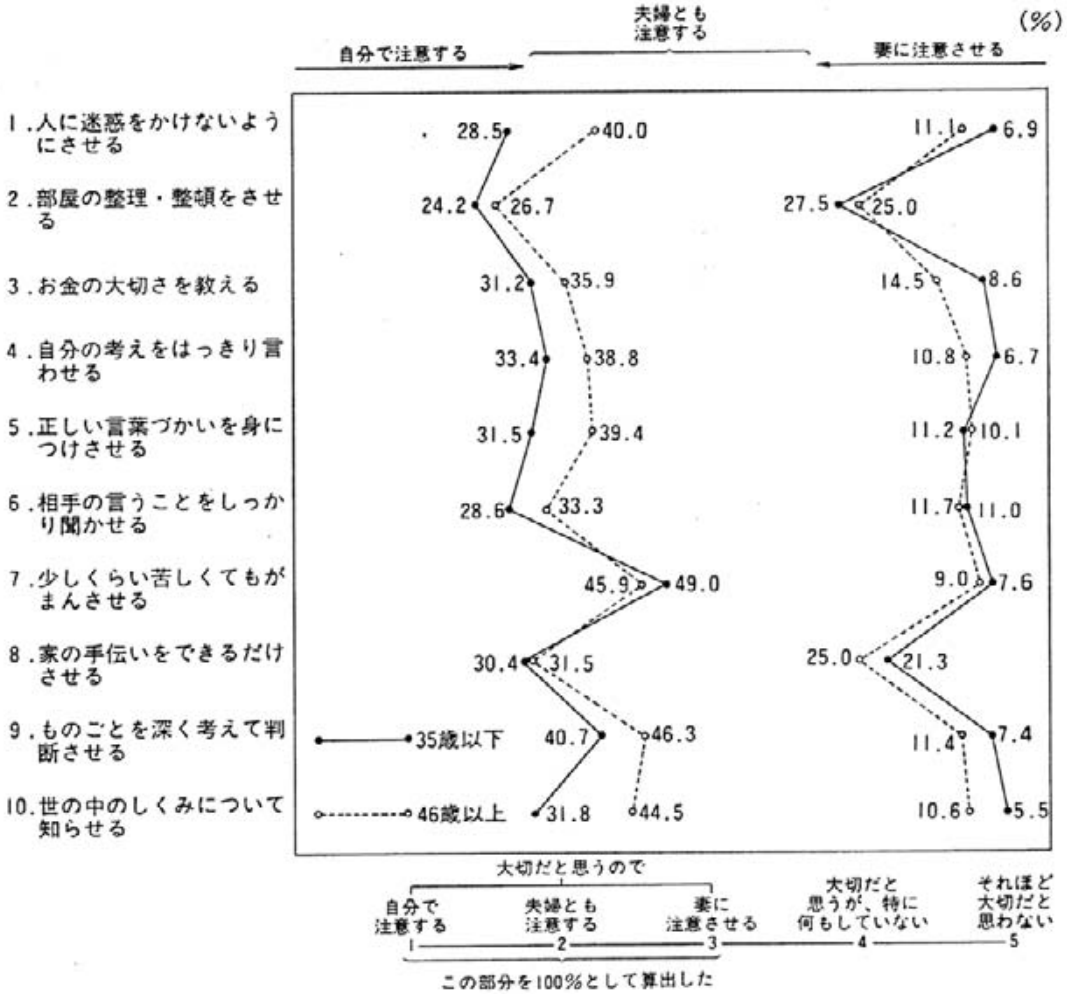
年齢別に示したグラフの位置関係に注目してみると、全体として、46歳以上の父親が内側に、そして35歳以下の父親が外側に寄っていることがわかる。

若い父親たちに注目してみよう。「自分で注意する」という割合が相対的に低い。そして、同様に「妻に注意させる」という割合もまた低い。つまり、彼らは家庭でのしつけを、妻との協同作業だと考え始めていることを示している。

こうした状況を子どもの側から見れば、父親と母親が同質化したと映るのであろう。

「モノグラフ・小学生ナウ vol.8－3父子

図24　しつけの実行率×年齢



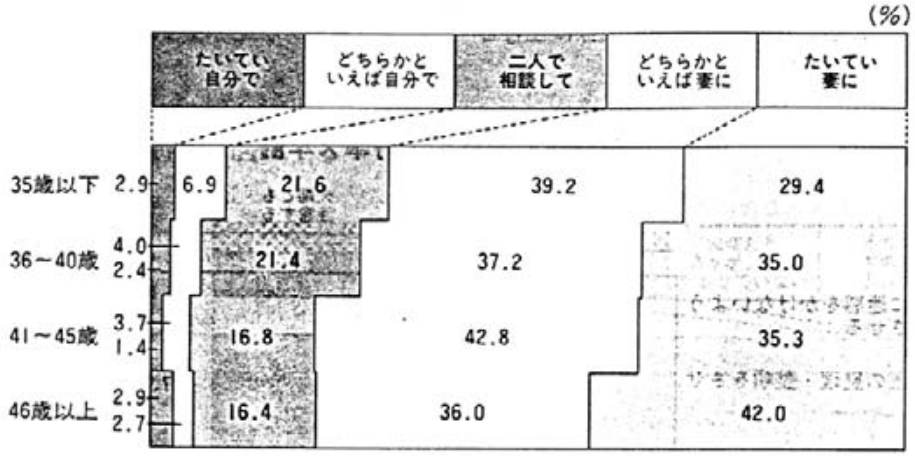
関係」では、パートナー型の父親の出現を指摘し、その功罪について考察した。

そこでのパートナー型とは、主として父親と子どもとの距離が接近したことを意味していた。いわゆる「友だちのような」お父さんのイメージである。

ここに示したデータは、「妻との二人三脚で子どもの教育にあたる」という新たな意味も加えることになろう。子どもとパートナーであり、そして妻ともパートナーであるという父親の存在——最近よく見かけるＣＦの一コマのようでもある。

念のため、こうした傾向を裏づける別のデータを、図25に掲げた。ご覧いただきたい。

図25　家庭教育の役割分担×年齢



4. 理想の父親像をめぐって

これまで見てきた父親のイメージからは、子どもや妻と友好的な関係を保ち、家庭の生活にも積極的に関与しようという意欲が感じられた。

多くの父親たちが、「企業戦士」ともてはやされ、家庭を犠牲にしてまでも職業生活に没頭していた時代は、確実に過ぎ去ろうとしているようである。父親が、家庭人としての確かな顔を見せるようになった。それは、成熟した社会の一面であるとも言えよう。

しかし、ここまではある種のイメージを追い、歪みを是正する方向に努力を注げばよかった。問題は、かつて体験したことのない新たな時代的状況の中で、これからどのような父親像を描けばよいかということであろう。

本章では、現在の父親たちの中にある理想的な父親像をめぐって、いくつかの角度から検討してみたい。

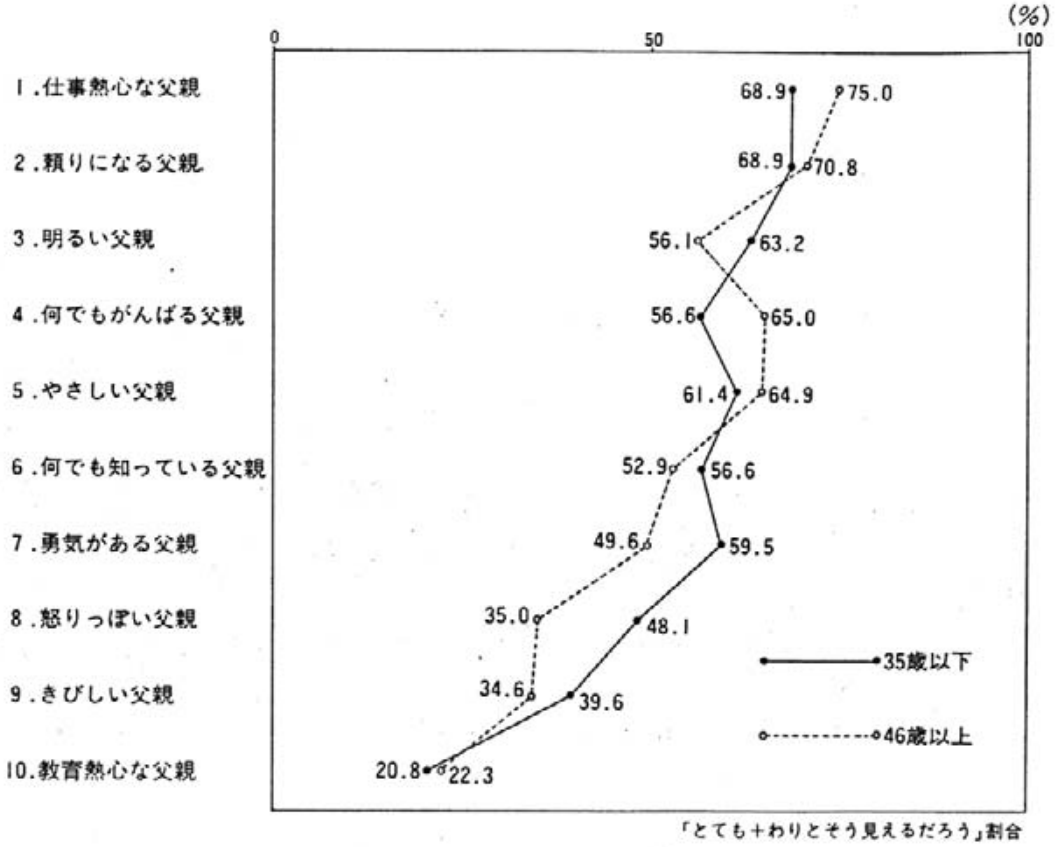
子どもから見た父親としての自分

図26は、子どもたちが父親としての自分をどのように見ているかを推測してもらった結果である。

それによると、多くの父親は「仕事熱心で、頼りになり、明るい」と、子どもたちが自分を好意的に見てくれていると思っている。そして、「怒りっぽく、きびしい」という否定的な要素の数値は、かなり低くなっている。

年齢別に見れば、若い父親たちは「明るい」「勇気がある」「怒りっぽい」などに、父親

図26　子どもから見た父親としての自分×年齢



としての自分の特徴があると考えている。これに対して、高年齢の父親は、「仕事熱心で、何でもがんばる」と、いくぶん異なるプロフィールを描いている。

子どもの頃見た自分の父親

次に、父親が子どもの頃見た自分の父親はどんなふうであったかを思い出してもらった結果が、図27である。

結果を読み取る前に、一貫して比較を行っている2つの年齢層の父親たちが少年期を過ごした時代の状況を再確認しておこう。

前にも述べたように、この2つの世代は、戦前・戦中に生まれた世代と、戦後の混乱が一応おさまった頃に生まれた世代とに分かれる。

例えば、わが国における家庭生活を一変させた画期的なモノのひとつに、電気炊飯器がある。この電気炊飯器は、戦後、大都市の家庭を中心に普及し、その後急速に全国に広まったとされている。

2つの世代を端的に比較するならば、彼らの少年期に、家の中に電気炊飯器がすでにあった世代とまだなかった世代とに分かれよう。

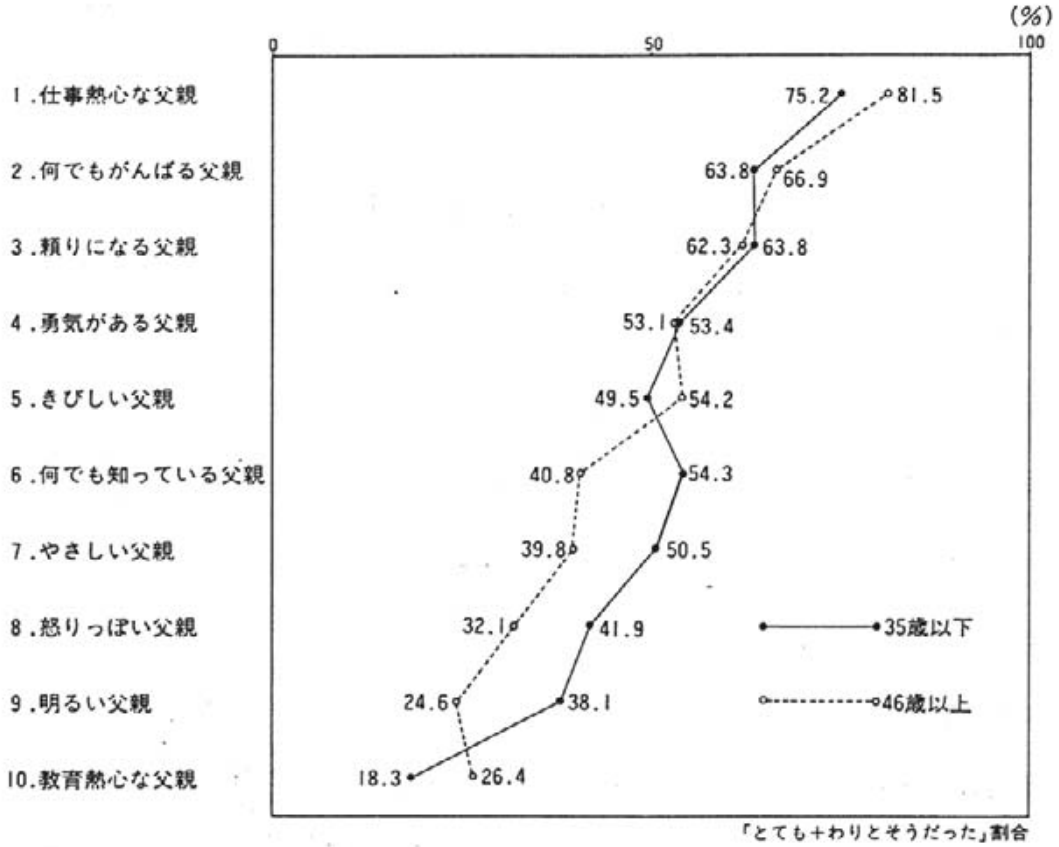
電気炊飯器を代表とする家庭電化製品が出まわる以前の家庭生活では、少なくとも妻が家事に専念するという夫婦間の役割分担が半ば必然的に求められていた。そうした時代の父親もまた、収入を得るための仕事に追われる毎日であったのだろう。

そうした時代的状況を念頭におくと、図27に示されている傾向は理解しやすい。

46歳以上の父親の父親は、「仕事熱心」ではあったが、決してやさしくも明るくもなかった。そして、わが子の将来を考えれば、いくぶん教育やしつけにも熱が入った。

その逆が、35歳以下の場合である。父親たちは、家庭の中でやさしく明るくふるまうようになり、その後に生じた父親たちの大きな変化の兆しが垣間見える。

図27　子どもの頃見た自分の父親×年齢



理想とする父親像

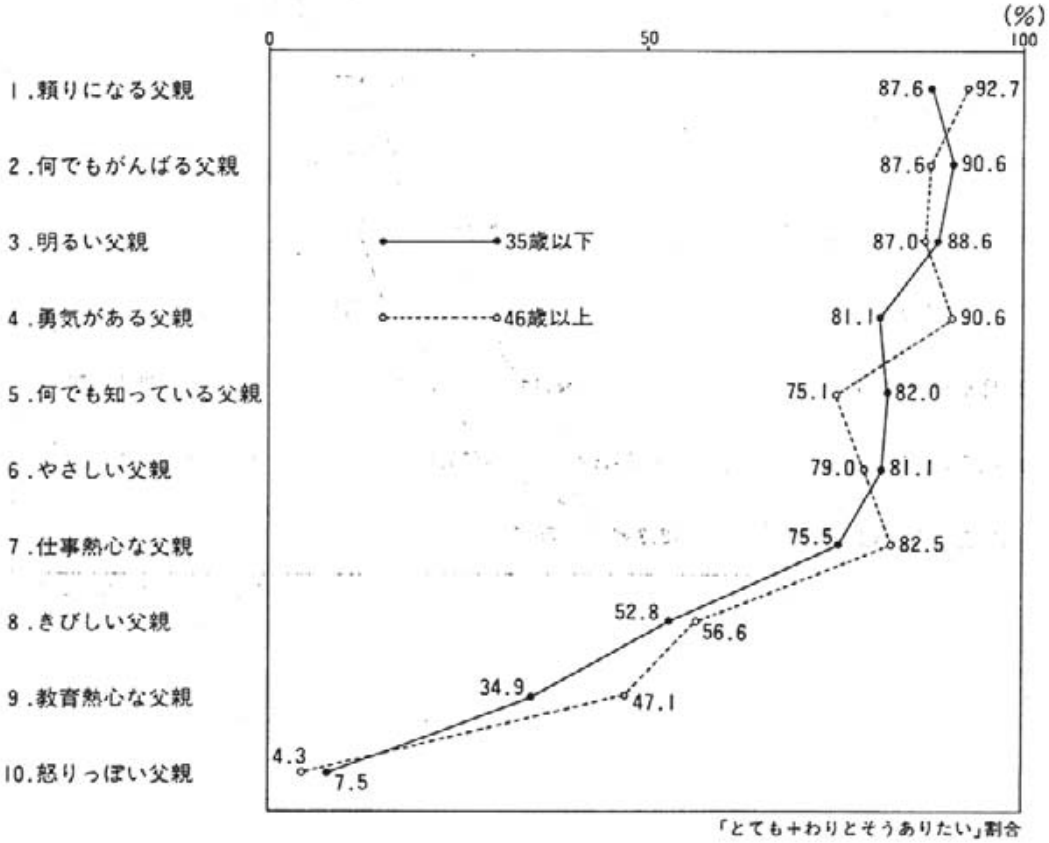
自分が少年期に見た父親と、父親になった自分。こうした2つの父親イメージの中で、現代の父親たちはどのような理想像を描こうとしているのであろうか。

図28は、これまでと同じ項目を用いて、理想とする父親像をたずねた結果である。

上位から、「頼りになり」「何でもがんばり」「明るく」「勇気がある」といった父親のイメージが連なっている。そして、いくぶん数値を下げながら、「博識で」「やさしく」「仕事熱心」という項目が続く。さらに、「きびしさ」や「教育への熱心さ」については意見が分かれるところであるが、「怒りっぽい」父親は論外である、というのが、理想とする父親の全体像である。

そして、相対的に見れば、高年齢の父親は「勇気があり」「仕事や子どもの教育に打ち込む姿」が理想的であると思い、若い父親は社会との接点で、情報源となる役割を重視している。

図28　理想とする父親像×年齢



父親像をめぐって

以上、3つの角度から、現代の父親の中にある父親のイメージについて探ってきた。

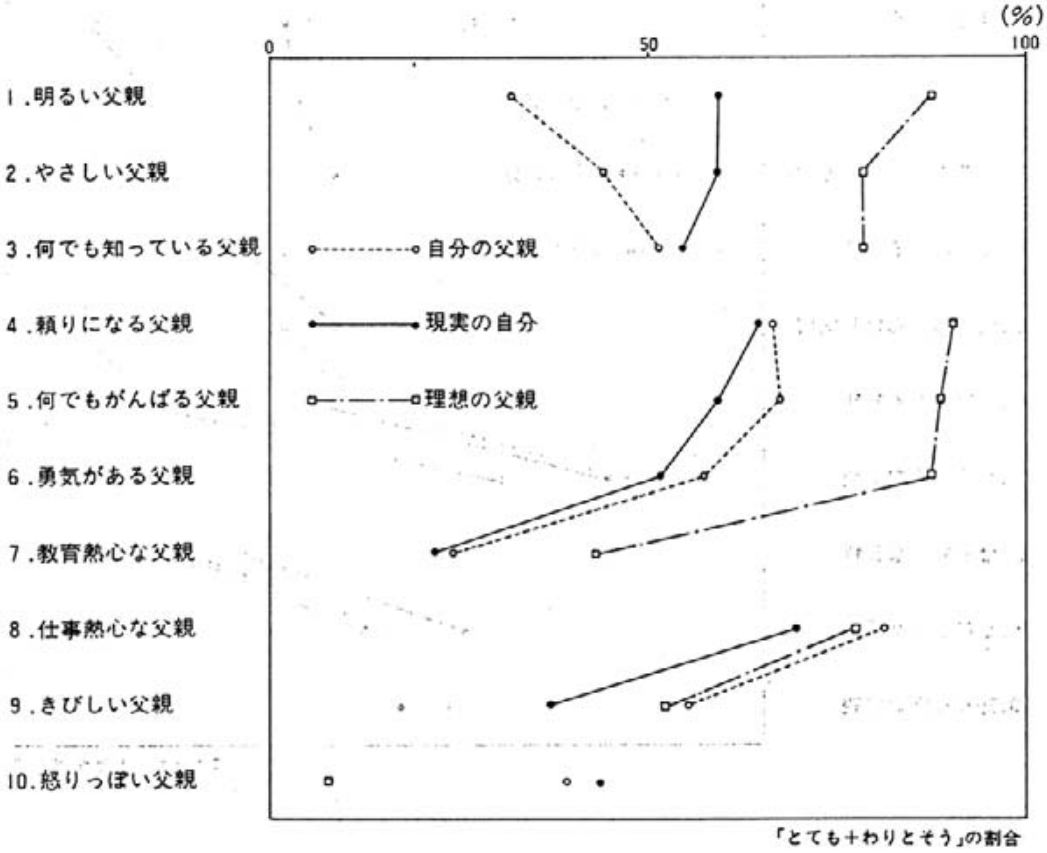
最後に、それらがどのような関係にあるかを整理しておくことにしよう。

図29は、「現実の自分」「自分の父親」「理想の父親」の三者の関係によって整理した結果である。

上位3項目は、すでに「自分の父親」を超え、「理想の父親」に近づこうとしている内容である。次いで、中段の4項目は「理想」はもちろんだが、「自分の父親」にももう一歩追いつけないことを意味する。それに続く2項目は、「自分の父親」ほどにがんばることが決してよいわけではないと考え始めた項目である。

パーソンズの図式による「引っぱり型（道具的役割）」の父親、あるいは、河合隼雄氏による「切断する」役割としての父親は、おそらくこの第2と第3の項目群にあてはまるのであろう。

図29　父親像をめぐって



「とても＋わりとそう」の割合

第３の項目群の特徴に注目すれば、ある意味では現代の父親たちが、こうした父親の役割に関する理論的な枠組みを、再構成し始めていると言えるのかも知れない。

そして、新たな要素として、おそらく第１の項目群が登場してくるのであろう。

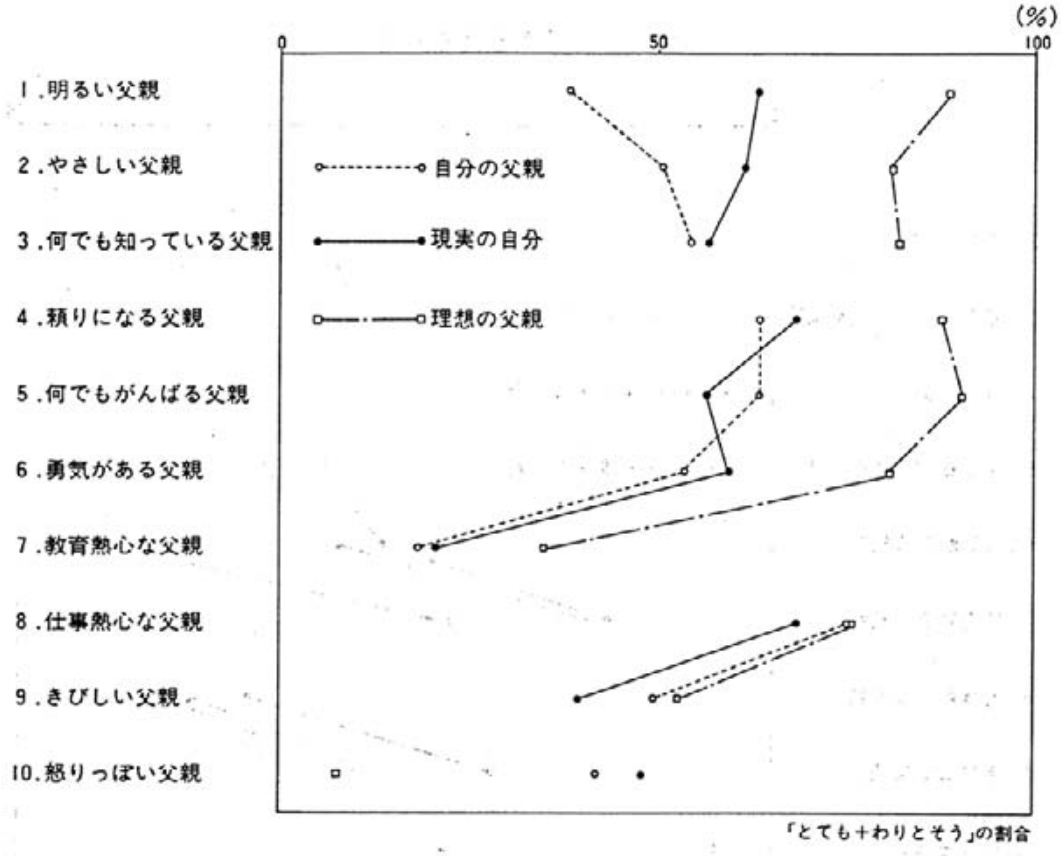
さて、そうした変化の最先端にいる若い父親たちのデータに注目してみよう。図30がそれである。

図29で見た全体的特徴と大きく異なるのは、「理想はおろか自分の父親にもまだ追いつけない」ことを意味していた第２項目群である。３つのグラフの位置関係から見る限り、いくつかの項目は第１の項目群と同じ性格を帯びてきていると言えよう。

「頼りがい」や「勇気」といった部分においても、若い父親たちはすでに自分の父親を超えたと自負している。

むろん父親が多くの部分で自信をもち、胸を張って子どもと向かい合うことは悪くはない。ただ一点、気がかりなことは、「頼りがい」や「勇気」の具体的な中味を、彼らがどうとらえているかという点である。

図30　父親像をめぐって(35歳以下)



まとめに代えて

われわれおとなが子どもを見つめるとき、心の片隅に自らの少年期の体験を思い起こしていることがある。ときには、それと比較しながら子どもを叱る場合もないわけではない。

しかし、生きてきた時代の条件が大きく異なれば、厳密な比較などは所詮無理な話であるから、父親たちの中には、むしろとまどいのほうが大きかったというのが率直なところであったのだろう。

さて、本レポートにおける考察の中心的な対象となった若い父親たちを筆頭にして、これから父親になる世代は、その子どもとほぼ同じ時代の相を生きることになるのだろう。

テクノロジーの驚異的な発達に支えられて家庭生活はますます便利になるだろうし、価値観は一層多様化するだろう。しかし、父親たちもそうした時代の変化が見え始めた時期に少年期を過ごすことになる。程度の差こそあれ、基本的な社会のしくみは、それほど大きく異ならないはずである。

加えて、家庭内における父親の地位を特別視する制度や風習は、現代のわが国においてはほとんど見られなくなった。

そうした状況を考慮すれば、母親と同質化し、家族のそれぞれとパートナーシップを結ぶ父親の出現は、それなりの必然性があったと言えよう。

そして一方では、若い父親たちは父親としての自分に、それなりの自信を持ち始めていた。その点に関するもうひとつのデータを紹介しよう。

図31は、父親としての自己採点に加えて、子どもや妻からの評価を推測してもらった結果を示したものである。

図31　父親に対する評価(35歳以下)

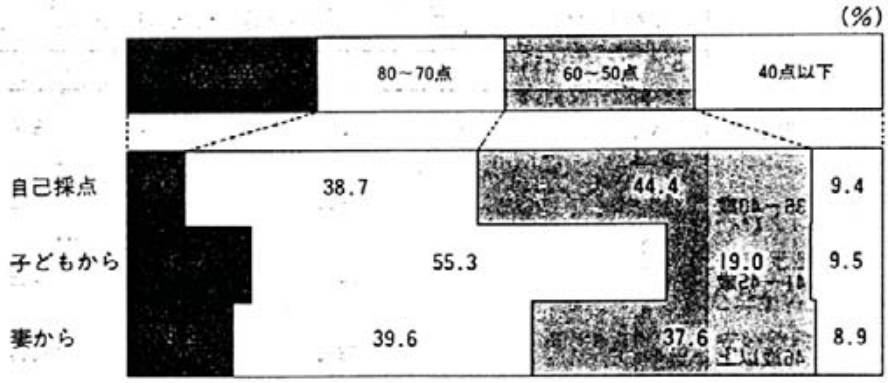


図32に示した46歳以上の父親のデータと比較すれば、子どもにのみ好評を博しているという姿が浮かび上がってくる。そして、図33のデータからは、家庭教育へのトータルな自己採点が、父親の年齢が異なっても大差がないことが示されている。

つまり、子どもの欲求を満たし意向に沿う方向で、現在の家庭教育の水準を保とうとしていることを示唆している。

こうした傾向を手がかりにするならば、母親たちが子どもへの影響に配慮しながらも、生きがいを求めて職場に進出し始めたのと同様に、父親もまた、一人の人間としての生き方を追求する存在であるべきなのだろうと思う。ことさらに父親としての役割を演じようとせずに、精一杯生きる率直な姿を家族に見せることが、今後に求められる父親のあり方と言えるのかも知れない。

図32　父親に対する評価(46歳以上)

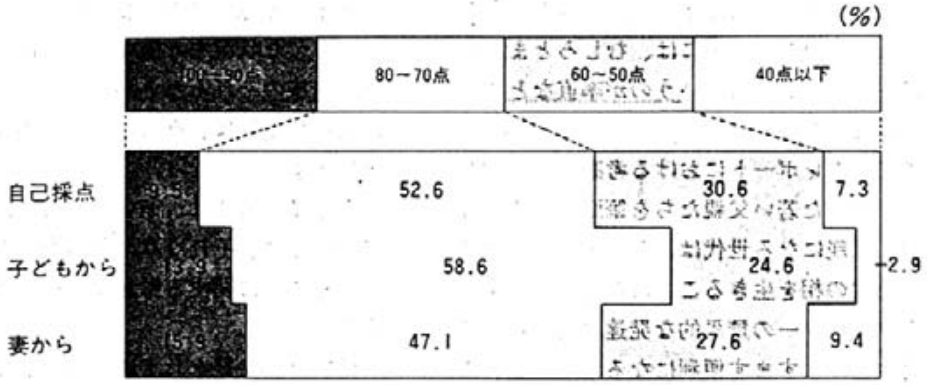
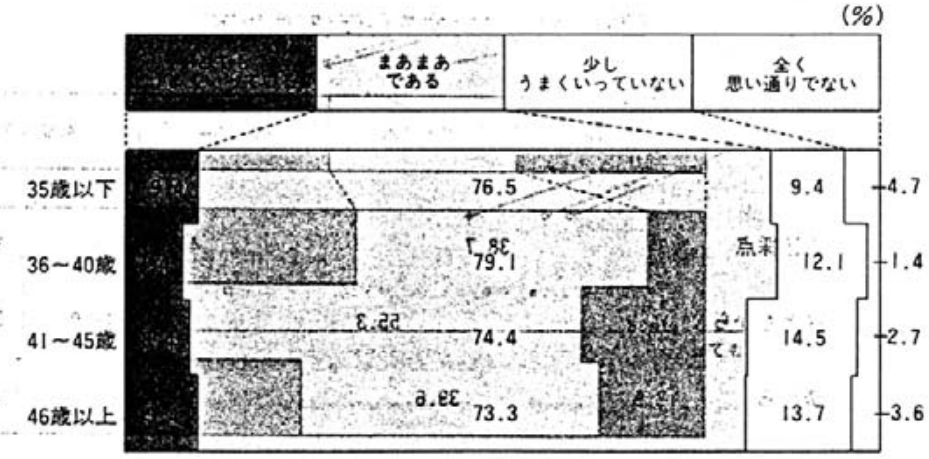



図33　家庭での教育はうまくいっているか×年齢